

---

# 東方従者録～すべては我が主の為に～

ワラキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方従者録／すべては我が主の為に／

### 【Zコード】

Z8502W

### 【作者名】

ワラキー

### 【あらすじ】

昔、とある館の主に仕えていた従者がいた。従者は主に忠誠を誓い、永遠に仕えることを誓いました。しかし、その従者はある事件にて、帰らぬ身となってしまいます。

時は現在、幻想郷にはとある噂が流れていきました。『人里で殺人事件が起きている』と。

これは、時を超えてでも主に仕えた、とある従者のお話。

## 第一話 それは昔のお話

それは、昔のお話。否、昔といつのはあくまで人間からの視点であり、妖怪から見てみたらそれは些細な時間かもしれない。が、今回はあくまで人間からの視点で話して行こう。

それは昔のお話。どこかのある吸血鬼が住む館の話。

「ねえ、　。紅茶はまだかしら？」

「はい、お嬢様。もう準備できています。」

「　、夜の散歩に行くわよ。」

「わかりました。ああ、お外は冷えますのでこれを着てください。」「フフフ、ありがとう。」

それはどこにでもありふれた、主と従者の形。主の背に、翼という人ではない証はあるものの、それはとても幸せにしそうだった。

「ねえ、　。ずっと、ずっと私と一緒に居てくれる？」

「はい、私が生きている限りずっとお仕えしますよ、お嬢様。」

とても幸せそうだった。その従者は常に主の傍に居続け、仕えていた。そんな日が、己が死ぬまでずっと続くものだと、そう思つていた。だが、どの時代も、どの世界も異形は虐げられる。無論、人ではない人外である吸血鬼も当然のごとく弾圧された。

## 魔女狩り。

正確には魔女ではないが、魔法を使うのは吸血鬼も魔女も同じ。しかも、その館には主の友である魔女もいた。人間にとつてはそれだけ攻撃する理由は十分だつただろう。

人間たちは攻めてきた。キリストのお偉い方を指導者にし、民衆が束になつて攻めてきた。

従者は抵抗した。主を守るため、ありとあらゆる手段を用いて抵抗した。

罠に嵌めて殺した。待ち伏せして殺した。指導者を暗殺した。直接自ら向いて殺した。騙し、敵同士に殺し合いをさせた。殺し、殺し、とにかく殺した。

こうして、従者は館を守つた。いや、守つていた。だが、従者は人間。大量の人を殺し、もはや従者の心は壊れていた。否、それだけではない。壊れ、狂つていた。狂い、人を殺すのに抵抗を感じなくどころか、逆にその殺戮を楽しむようになった。

そして、狂い、殺し、狂い尽くし、殺しの限りを尽くした結果、従者は倒れた。四肢を矢で貫かれ、胸にも矢が数本突き刺さり、既に死ぬことは目に見えていた。そんな従者の最期の言葉は……。

「お……じょ……さま……。お怪我は……ないですか？」

「……ええ、大丈夫よ。誰も、傷一つないわ……。」

「そう……です……か。よか……た……。」

そう、従者は破綻し、狂つても尚、主との館を守り続けていたのだ。

「い、まま、で・・・ありがと・・・『やこせ・・・した。レミリ

アお・・・嬢さ、ま。」

「・・・私の方も今まで世話になつたわ。ありがとう、十三夜鏡夜。

私の一番の従者。」

これが、主と従者の最期の会話だつた。しかし、従者は息を引き取つた。

## 第一話 殺しても良い妖怪ですか？

「レミリア」

「……嫌な夢を見たわ。」

私が起きたと同時に口にしたのはそんな言葉だつた。嫌な夢。しかもその中でもとびっきりの悪夢。思い出したくもない。私の不甲斐無さで一人の従者が死んだ事など。もつと、あの時何か出来たのでは？もつと私がしつかりしていれば従者……鏡夜は死なかつたのでは？

・・・止めましょ。過去を悔いても意味がないわ。考えたところで、もう彼はいない。

と、思考を断ち切ろうとしたとき、ドアがノックされた。

「おはようございます、お嬢様。起きていますか？」

「ええ、起きてこるわ。」

「では、お着替えのお手伝いをさせていただきます。」

と言つて、私の部屋に入ってきたのは十六夜咲夜。私のメイドでこの紅魔館のメイド長をしている。咲夜はとても優秀で私の自慢のメイドよ。

服を着替えている途中、咲夜が話しかけてきた。

「そう言えば、お嬢様はあの噂を存じですか？」

「あの噂？」

「はい、人里の人間の間で騒がれているのですが・・・。」

「どんな噂なの？」

「それが・・・、人が殺されているそうです。毎晩一人ずつ。ですが・・・。」

「歯切れが悪いわね。何かあるの？」

「人里では殺されてると言つているのですが、どうもおかしいのです。」

「何が？」

「人は、一人も殺されていません。病死や、老衰は別ですが、ここ最近で殺人などありませんでした。」

「・・・どう言う事？人が殺されているという噂はあるのに、その実、人は殺されていないというの？意味が分からないわ。」

「おかしいわね。噂というのは必ずどこか起源があるはずなのだけれど・・・。」

「はい。だからおかしいのです。噂に多少の尾ひれ背びれは付きものですが、事実がその全ての間違というのは普通はあり得ないです。」

「そうね・・・、咲夜、少し調べてみなさい。その噂に興味を持つたわ。」

「御意。あ、そういうえば。」

「今度は何？」

「その人を殺して回っているのは、金髪の執事服を着た男だと言つていました。」

「・・・そう。まあ、いいわ。調べて来て頂戴。」

「御意。」

・・・金髪の執事服？いえ、まさかね。今日あんな夢を見たからそ

んな事を考えてしまうのね。彼が生きている筈がない。彼が死んだのは・・・・もう、300年も前の話なのだから。

「紫」

「ここ最近、幻想郷はある噂でもちきり。それは、『人里で殺人事件』というもののだけで、どうもこの噂、不可解な点が多すぎる。実際、人里では殺人事件など起こっていない。しかし、実際にそう言う噂は流れている。おかしい、明らかに異常事態・・・・いえ、これは『異変』ね。」

「ハア、つい最近、あの地底の異変が終わつたばかりだと言うのに、今度は変な噂の異変。いつになつたら幻想郷は落ち着くのかしらね。」

「紫様、藍です。」

「入りなさい。」

「失礼します。紫様、人里での件、調べて参りました。」

「そう。で? どうだつた?」

「・・・白です。人里での殺人事件は起きていませんでした。しかも・・・」

「しかも?」

「その噂の起源がありません。つまり、いつの間にやら、何の前兆も無く突然噂が発生したという事になります。」

「・・・不可解ね。それはもう噂ではないわ。」

「だが、こんな事は前代未聞。起源のない噂などありえない。そう、ありえない。必ず、どこかに起源はある。」

「・・・嫌な予感がするわね。藍、その噂の起源をもつとくまなく

探しなさい。博靈大結界に干渉しても探し出しなさい。」「分かりました。では。」

さて、私も少し、探つてみようかしらね。

～～～～

・・・ああ、この土地は他に比べて靈力、妖力、そして魔力がすごい高いですね。いいですね、いいですね、いいですね。これなら、私の姿もずっと留めて要られそうですね。あわよくば、『お嬢様』もここに居られたら最良なのですが、まあ適当に『種』を貰いただけなのでその可能性は限りなく少ないですね。まあ、地獄から逃げだせただけでも良しとしなければなりませんね。

「ねえ。」

おおつと、誰かに話しかけられてしましましたね。驚きです、驚きです、驚きです。

「なんでしょう?私如きに話しかけてくるなど、よつぱりお困りでしょう。私でよければ色々解決して差し上げますよ。」

「ホント!?じゃあ、あなたは食べられる人間なのかー?」

おおつと、『じつやう』の土地にも人食い妖怪なるものがいるようですね。またまた驚きです。いや、この『』時世にこれだけの妖力を持つている妖怪がいること自体が驚きなのですが、まあ、今はそんなことは些細なことですね。

「ふむ、食べれるか食べれないかですか。それは難しい質問ですね。まあ、あなたが妖怪なら私も当然食べられるのでしょうか。」

「なら、食べても良いのかー？」

「私ですか？そうですね・・・あ、良いですが、条件があります。」

「？」

「私がする質問に答えてください。迅速に、尚且つ分かりやすく、一字一句噛むことなく、答えてくださいされば、食べても良いですよ。」

「わかったのだー。」

「では、まず一つ目、あなたのお名前を教えてください。」

「ルーミアなのだー。」

「そうですか、では、ルーミアさん。一つ目の質問です。あなたは

「

「殺しても良い妖怪ですか？」

「・・・え？」

「私も最近はサボつてましてね、鈍つていたのですが、ここいらで調子を取り戻さないと駄目なのですよ？理解しましたか？ヒ、ヒヒヒ、で？どうなのですか？あなたは、ヒヒ、殺、殺シテモ問題ナイ妖怪デスカ？」

## 第二話 まあ、良い運動になりました

ふむ、この土地の妖怪のレベルはこの程度なのでしょうか？

そう言って、手に掴んだ血まみれの少女を見てみます。確かに奇妙な能力を使つてきましたね。あれは闇でしょうか？いやや、持つ能力も使い方次第とは良く言ったものです。まあ、闇如きで私はどうにも出来ませんが、そうですね、ラジオ体操ぐらいにはなりましたね。次は準備運動です。とりあえず、このルーミアとやらの脳から情報を知らなければなりませんね。この土地にもそれなりの使い手はいるでしょう。楽しみです、楽しみです、楽しみです。

・・・おっと、先走つてはいけませんね。その前にこの土地に流した情報・・・噂を決まりごとにしてブームにしなければ。私もまだ完璧に現界したわけではないですからね。

「・・・ふむ！成程、花畠ですか。ここは魔法の森という所らしいですから、・・・場所が分からぬですね。飛んで行つた方が早そうです。」

さて、今度の相手は、準備体操どころかフルマラソンを走つた後になるくらい楽しませてもらえる事を期待しましょう。

（紫）

「紫様！噂に変化が！」

「何ですって？どんな？」

「それが・・・遂に殺された人と殺した人を見たという人間が現れ

ました。」

「なら、殺された人はいるのね？」

「・・・いえ、いません。ですが、人里ではもはや確實に殺人事件は起きているものとなっています。」

一体この現象は何？何故火も無いところからそんな噂が流れるのか理解できない。

「ですが、分かつた事もあります。」

「何かしら？」

「どうやらこの噂、力がある程度ある人や妖怪、妖精には伝わっていないそうです。」

・・・成程、どうやらこの噂、何者かが裏で糸を引いているわね。恐らく、能力による干渉。だけど・・・。

「目的が分からないわ。こんな根も葉もない、力がない者だけが信じ込む噂を流して、流した方にはなにもメリットがない。」

「反乱とか、幻想郷の壊滅が目的でしょうか？」

「否、それは無いわ。それが目的なら、もっと洗脳能力が高く、力のある者も信じ込む噂を流すはず。だから、ますます分からぬいのよ。メリットが考えられない。」

ああ、もうつ、あと少しで冬眠の時期だから早く寝る準備しないといけないのでまつたく面倒な時に面倒な異変に出くわしちゃつたじゃない！

「失礼します。八雲紫、いますか？」

・・・面倒な時に面倒なのが来たわね。

「あら、閻魔さまではありませんか。このよつな所に一体どう言つたご用で？すみませんが、お説教はまたにしてくれると助かるのですが？」

「あなたの私に対する評価が良く分かりました。しかし残念ながら、今日は説教ではありません。少し、地獄の方で問題があります。」「地獄？私たちには関係ない話だと思うのですが？」

「大あります。というか、最後まで聞いてください。その地獄の問題ですが、今から約200年前にある魂が地獄から逃げ出しました。もちろん、その魂を捕まえようと大量の死神を派遣して捜索に当たりました。」

「ならば、問題はますますない筈ではありませんか。一魂が地獄から逃れられるとはとても思いませんが？」

「だ・か・ら！話を最後まで聞いてください！因みに、問題は大ありです！その魂は確かに発見されました。が、一度も捕まえる事は敵いませんでした。何故か、それは、発見した死神は一人残らず殺されているからです。」

・・・たかが一魂が死神を殺す？

「それに、その魂が現れる時も特殊なのです。現れる地域に、何らかの根も葉もない噂が流れ、その時にその魂が現れます。いえ、現れると言つのは、語弊がありますね。その魂が発生します。そして、その噂された地域の住民を皆殺しにして、また消えるのです。」

噂？それってまさか、今この幻想郷で起きている事と何か関係が？

「そして、その魂が、今日、地獄にて観測されました。その魂は地獄では有名なS級の指名手配犯なので情報が回るのが早いです。」

「まさか、その魂が・・・。」

「はい、しかし、もう既に魂とは言えませんね。肉体を持つてしまつていますが、その魂が今日、この幻想郷にて、『発生』しました。」

「これは、冬眠がどうのこのいつている場合では無くなつてきたわね。」

「当然です。下手すれば幻想郷の危機ですの。で、あなたにお願いがあります。」

「その魂を特定して、迅速に殺せ、というものでしようか？」

「いえ、半分違います。迅速に生け捕りにして、私の所まで連れて来て下さい。私の方も今回はあなたと協力して行動します。」

「閻魔さまからの直々の頼みを、断る道理はありませんわね。更に、それが幻想郷の危機と言われば尚の事。」

「（胡散臭い）よろしくお願ひします。今回、この事に当たるにおいて、幻想郷でもトップクラスの方々の招集をよろしくお願ひします。私は、地底と白玉楼、妖怪の山を当たります。」

「では、私のほうは博靈神社、紅魔館と永遠亭それとお花畠を訪ねてみます。」

「魔法の森と天界の方は？」

「魔法の森は博靈神社を訪れれば、必ずと。天界は嫌いなので却下ですわ。」

「一応、幻想郷の危機なので、好き嫌いで判断してほしくないのですが・・・。」

「今日は、結構、いや、かなりの大事になりそうね。」

（レミリア）

「と言つわけです。協力して下さると助かるのですが？」

今、あの胡散臭いスキマ妖怪がこの紅魔館に来ている。用件は簡単にまとめるに、幻想郷の危機だから協力してその原因を捕まえて、地獄に送り返すというものだった。

「なんで、私たちがそんなことしなくちゃいけないのよ？」

「あら？ 別に協力してくれなくても良いですよ？ その際、もしこの館が被害にあっても私たちは一切関与しませんが。」

ちつ、ちつぱりやり辛いわね。

「まあ、いいわ。私たち紅魔館もその件、協力をさせてもらひつわ。皆も良いわね？」

そう言って、紅魔館の住民・・・咲夜、めい・・・中国、パチュリー、そしてその従者の小悪魔を見る。

「問題ありません。」

「咲夜さんに同じくですが、私は中国ではありません！ 美鈴です！」  
「レミィが決めた事なら、私も異議は無いわ。」

「私もです。」

「そう言つわけよ。で？ それはいつやるの？」

「今日ですわ。」

「随分急ね！？」

今日！？え、今日なの！？てつかり明日とか、そのあたりだと思つていたのに、よりも寄つて今日なの！？急過ぎだわ。

「じゃ、もうじくお願ひしますわ。」

と言つて、あの胡散臭い妖怪はスキマの中に消えて行つた。

「……良かつたのレミィ？ 今日ま……あいつの命日でしょ？ 」  
「……そうね。ま、いいわ。ちやつちやと終わらせましょ。」

よりもじつて、鏡夜の命日に……ハア。

「あの……パチュリー様。」

「何？」

「あいつとは一体……。」

「ああ、そう言えば咲夜には話したことなかつたわね。レミィ、話しても良いかしら？」

「ええ。」

まあ、咲夜になら話しても問題ないでしょ。日々話さうとも思つていたし。

「なら、話すわ。」この紅魔館が昔……今から250年前まで外の世界にあつた事は知つてゐるわね？

「はい、存じています。」

「あいつとは、その時レミィに仕えていた執事の事よ。仕事もうまくこなすし、器量よし、顔よし、性格もよしと、とにかく何でもできた執事で、レミィもよく懐いていたわ。」

「パ、パチエー？」

な、何よー。今そんなこと言わなくとも良いじゃない。

「フフフ、でね、その執事なんだけど、ある出来事の末、死んでし

まつたのよ。その命日が今日つて話。」「ある出来事とはなんですか？」

「まあ、簡単に言うと、人外を殺せと言う人間の宗教じみた行動よ。彼は、その人間たちから私たちを守るために、心が壊れて、狂いながらも戦い、そして死んでしまったのよ。」

そう。彼・・・鏡夜は、そうやつて死んで行つてしまつた。今でも思う、あの時、今の私ぐらい力があれば、鏡夜は死なずに済んでいたのではないか?と、

「正直、後悔しているわ。あの時は私のそこまで魔法が使えなかつたから、戦闘面においては全部彼に任せてしまつていたの。」「そう・・・ですか。」

「まあ、済んでしまつた事を後悔しても遅いと言つ事で、今の私たしがあるのだけれど。話はこんなものかしら?」

「はい、ありがとうございました。」

そうね。鏡夜の死を乗り越えて、今の私たちがある。今のこの状態は間違いなく、鏡夜が与えてくれたものだわ。

「ところでレミィ。」

「何?」

「その発生している魂の話だけど、本当に大丈夫かしら?」「何が?」

「さつきから何何しか言わないわね・・・。スキマの話を聞いたところ、その魂、矢鱈強いみたいよ?何か対策はして行くの?」

「フッ、愚問ね。どんな強者が現れようと、この爪で引き裂いて進むのみよ。」

「ハア、そう言つて思つていたわ。じゃあ、対策は無しで良いわね?」

「ええ。」

フフフツ、どんな奴なのか楽しみだわ・・・。ああ、早く会つてみたいわね。

「？？？」

花畠に着きました。ふむ、素晴らしい。こまどりのよくな花畠、滅多にありませんよ。おおっと、もうこれ（ルーミア）は必要ありませんね。その辺にポイして行きましょう。ゴミをポイ捨てしてはいけないという法律はあれど、妖怪をポイ捨てするなど言つ法律は無いですから、問題は皆無でしょう。・・・死体遺棄に、妖怪は入るのでしょうか？

それにしても・・・

「素晴らしい花畠ですね。お嬢様にもお見せしたい。」のよくな素晴らしい花畠を手入れしている方は、さぞ心が綺麗で、善良で、殺しがいのある方なのでしょう。いやはや素晴らしい。この花畠に拍手喝采を要求したいのです。」

「あら？なら、要求して貰つても良いかしら？不法侵入者さん。」

おや、誰かいたよつですね。まあ、いふことに来たので当然いるに決まつてゐるのでしょうか。

「分かりました。では、拍手喝采を要求します。まあ、私が要求して、それが起こる可能性は皆無なのですがね。」

「そりやそうよ。それよりも私はあなたから面白い言葉を聞いたのだけどいいかしら？」

「ふむ？私が面白い事を？記憶にありませんね。洒落を言つたつも  
りもありませんが。」

「言つたわよ、殺しがいがあるつて。」

ああ、アレ。面白い？何が？分からぬ、分からぬ、分からぬ。

「面白かつたですか？別段、面白い事を言つたつもりもなかつたの  
ですが？」

「ええ、最高に面白かつたわ。まさか、私を殺すだの言つてくるな  
んて。」

「え？あ、もしや、あなたは不死の類でしょ？おお！これはこ  
れは、またまた、珍しい。今までありとあらゆる場所を見てきまし  
たが、不死の類は見た事がありませんでした。ふむ、この土地には  
妖怪以外の珍妙な生物も生息しているのですね。いやはや、この土  
地の靈力、妖力、魔力のお陰でこの姿を永久に留めて置けるだけで  
はなく、さまざまな多種多様な生物が生息している！何と素晴らしい  
！エクセレント！！こんなにも殺しがいのある土地も久しぶりで  
す！ヒヒヒ、ヒヒヒヒヒ！良イ！良イ！良イ！サア！開幕ダ！貴  
殿ノ脳髄ヲブチマケ内臓ヲグチャグチャニカラダノ外側ト内側ヲ  
逆サマニ！キキ！キキキキキキ！」

「氣でも触れてるの・・・？」

「キ、キキ！キキキキキキ！さあ！行くぞ！」

（幽香）

「さあ！行くぞ！」

目の前の狂人が消えた、と思つた瞬間、目の前に黒い何かを纏つた

彼が現れた。

「カツトオ！」

「つ！」

本能的にそれを避ける。どうやら、唯の『人間』という認識を改めた方が良さそうね。

あの黒い何かが何であれ、まずは攻撃をしない事には始まらない。

「喰らいなさい！」

傘を胸を薙ぐように全力で振る。が、

「ヒヒヒ・・・・。

それは、あっさり、単純に手で受け止められた。それだけでなく、黒い何かが傘に纏わりついて来る。

「くつ、こんなもの・・・！」

それを振り払うために、傘を振る。しかし、私の手に感じたのはいつもよりも軽い感触だった。

「なつ・・・。」

傘が、傘の持ち手から先が無くなっていた。まさか、あの黒い何かが？ だとしたら、あのくらい何かには触れては絶対にいけないわね。使用価値が無くなつた、傘の残骸を捨て、私のとつておきの技を放つ。

「マスター、スパーク……！」

その手のひらから放たれた光線は、文字通り、あの狂人の腰から上を消し飛ばした。

「え……。」

正直、これで終わるとは思つてもみなかつた。あつけない。初めのうちはかなりの危機を感じたものだが、実際に技を使えばこの程度。拍子抜け、この言葉が今の状況に一番あてはまるだろ？

「なんだつたのよ一体……。」

狂人の亡骸に背を向け、家に帰る。その時……

「キキ！キキキキキキ！－！」

「つ……？」

耳にこびり付くあの笑い声が聞こえた、後ろを振り向くと、まだ頭部が完治していないのにも関わらず、笑っている狂人がいた。

「……どうやつたのかしら？」

「ヒヒヒヒヒ！恐怖したか？絶望したか？いいぞ！その感情を抱いたまま死んでいくが良い！！」

訳が分からぬ。何故、胴体を消し去られて生きていられるのか。だが、今はそんな事よりも、目の前に危険人物を消した方が良さそうね。

「マスター

」

その名を紡いだとした瞬間、狂人の方から

「それにはもう飽きた。」

と、聞こえた気がした。

「スパーク！！」

次もさつきと同じように喰らうものだと思っていた。しかし、目の前で信じられない事が起きた。

「ブレイク！！」

「・・・え？」

狂人が黒い何かを拳に纏い、それでごく普通に、迫りくる光線を殴つた。均衡したのは一瞬。次の瞬間には、光線は跡形もなく消えていた。

「・・・ヒヒ、準備運動にはなった。感謝するとともに、終幕としよう。何、準備運動に協力してくれたお礼に、命まではとらないであげましよう。」

「つ、なめるな！！！！！」

狂人に殴りかかる。己の最高の力とスピードにより、一瞬で狂人の前に移動し、狂人の顔面を思いつきり殴る。筈だつた。

「カット・・・」

そんな言葉が聞こえた瞬間、私の殴るために狂人に突きだした腕が

消えた。遅れて、大量の血が腕から噴き出していく。

「ぐる、ぐるるーー?」

「ヒヒヒ、カツト・・・。」

その言葉がまた狂人の口から発せられる。だが今度は何かが切られる訳ではなく、黒何かが私の周囲で回りはじめた。

「カツトカツトカツト・・・。」

その黒い何かは、密度を増し、さらに回転し始める。

「カツトカツトカツトカツトカツトカツト・・・。」

その黒い何かはさらに密度も回転も増し、次第に私の皮膚を切り裂いていく。

瞬間、私の意識は黒い何かに覆われると同時に途絶えた。

{} ? ? ? { }

ふむ、正直、結構やばかったですよ。まさか上半身が消し去られるとは思つてもみませんでした。準備運動どころか、長距離走を走つたような感じになつてしましましたよ。まあ、長距離走つたぐらいではあまり疲れないのですが、良い運動にはなりました。

彼女は・・・ああ、勢い余つて達磨にしてしまいましたか。ま、死にはしないでしょ。かなり力のある妖怪のようですから。

「さて、次はどこに行きましょうか。」

彼女の頭を掴み、さらに情報を探していく。

「紅魔館・・・ふむ、吸血鬼！本当にこの幻想郷は多種多様な生物のオンパレードですね！！良い！実際に良い！他には・・・鬼、亡靈、地獄鴉、大妖怪！…素晴らしい、此処まで殺しがいのある地域も久しぶりです。ヒ、ヒヒヒ、・・・ああ、ですが、紅魔館は止めておきましょう。『お嬢様』の同族を殺す訳にはいきませんからね。・・・もしかすると、『お嬢様』かもしれませんね。だとすると、早速確認しに行かなければ。」

ああ、ですが、今日はもう遅いですね。私も久しぶりに力を使った訳ですから、少し休んでいきましょう。

「そりと決まれば、休める場所を探しましょうか。」

## 第四話 急展開？お嬢様の為なら世界もひっくり返しますよ

（紫）

「道さん、お集まり頂きありがとうございます。」

現在、紅魔館にそれぞれの力のある者たちが集まっている。紅魔館はもちろん、幽々子と妖夢、永遠亭のお姫様とその従者その弟子、守矢神社の神とその巫女、さらにあのパパラッチとその部下、そして、靈夢、魔理沙、萃香、アリスと博靈神社にいた人物も集まっている。更に私の方も藍と橙を連れている。閻魔さまもあの赤髪の死神と幽香を連れてくるからまさにリンチと言つても過言じゃないほどになつていいわね。どこの魂だか知らないが、さすがにこれには同情するわ・・・。

「スキマ妖怪、まだなの？待ちくたびれたわ。」

「まあまあ、もう少し待つて下さいな。」

と、言つと同時に扉から小さい影と大きい影が生えてきた。

「すみません。遅れました。」

「いえいえ。・・・あら？幽香は？」

「・・・これだよ。」

そう言つて死神が背に背負つていたモノを下した。

『つーーー?』

そこには、血まみれになつた人食い妖怪と、達磨になつた幽香がいた。

「永琳さん、すぐに治療を。既に、彼は発生して行動を開始します。もはや一刻の猶予もありません。」

「・・・そう言えば、聞いていなかつたのだけど、その発生した魂はどれくらい強いのかしら?私たちの手に余るのか、余らず、完膚なきまでに叩きのめせるのか。」

と、レミリアが質問してくる。そういうえば、私も知らないわね。死神が死んだ事や、発生した地域の住民が皆殺しにされていること以外、聞かされていないわ。

「・・・それが、分からないです。」

「分からない?どういう事?」

「実は、その魂、発生する時期によつて強さが激しく変わります。それに関する調査が付いています。どうやら、彼の強弱は、噂の強弱に左右されるようです。つまり、彼の今の強さは・・・恐らく、此処に居る全員でやつと、と言つたところでしょう。」

・・・そんな規格外な妖怪も、まだ居たのね。

「弱点はあるの?」

「あります。彼は、靈力、妖力、魔力が無いと、あまり長く・・・  
そうですね、一晩ぐらいしか現界出来ないのですが・・・。」

「ここは幻想郷。その弱点は無いものと考えた方が良いですわね。」

「そうです。・・・あ。」

「どうか?」

「い、いえ、それが……あまり言いたくは無いのですが……ありました、もう一つ。」

「…どんなものが？」

「そ、それが……あの、攻撃しないのです、その、子供を……。」

「…………』

それってつまり……ロリコンってことかしら。

「つまり、ロリコンってことね。」

「ですが、おかしな点もあります。」

その弱点に地底の管理者が異を唱えた。……若干顔を赤くして。

「だとしたら、何故そこのがーっと、ルーニアさんでしたか？その人は何故攻撃を受けているのでしょうか？」

「恐らく、境界して間もないで氣でも触れているのでしょうか。まあ、元々、氣が触れていましたが。」

・・・氣が触れていてロリコンって、これ結構楽に捕まるんじやないかしら？だつてこのメンバー、結構いるわよね？幼女体系。

『幼女体系って言つたな！』

「これは失礼しました。では、作戦は決まったも同然ですわね？」

「はい。まず最前線に、諏訪子さん、レミリアさん、萃香さんを配置し、その後ろにセラとつさんと澄さん、てゐさんを配置。あとは後ろで援護です。」

『ちよつと待つたあ……』

全員で同時ツツツ「ミミ」ね。無論、私もツツツ「ミミ」たいのだけれど。

「な、何ででしょ?」

「最前線にあなたが入ってないわよ!—」

「その通りです。自分だけ安全地帯から攻撃するなど、ズルすぎですよ。」

「わ、私は幼女体系では・・・。」

「十分幼女体系です。何?『あなた程ではない?』別に程が云々言つているではありません。それに、私は脱ぐとすごいですよ?」

「心読んだ上に何言つているのですか?!!」

「事實を暴露したままでです。何?『見え張つてんじゃねえ?』なら、

証明して差し上げましょ?」

「結構です!」

「と言つわけで、あなたは最前線です。皆さん、異議はありますか?」

「ちょ、何勝手に」

『異議なーし!—』

「ええ!—?」

・・・やとりも容赦ないわね。

「ふむ、で?これは何の話でしたつけ?」

「あ!—そうです!兎に角、その陣形で彼を・・・。」

・・・あれ?今のはおかしくないかしら?男の声で質問が来たけど、この場に男なんていかしら?否、いない。いるはずがない。ここで、私はある致命的なミスをしていた事に気付いた。彼の特徴はある噂が蔓延した地域に現れる。この『ある噂』とはひょつとして彼の噂、もしくは彼に関係した噂ではないか?いや、そもそも発生条件が噂だけと言つのも違つ気がする。彼の話をしていく、それも多人数所にも現れるのではないか?

そして、私たちは今、『彼』を捕縛するための作戦を考えていた。つまり、彼の事に関して話していた。

この答えに辿り着いた瞬間、声の元の周囲にスキマを展開し、そこから大量の弾幕を発射した。

爆音が紅魔館に鳴り響いた。

「・・・迂闊でした。」

「ですが、これで・・・。」

「いえ、まだです。彼がこの程度でやられるのなら、我々地獄も捕縛は簡単でした。」

直後、夢に出そうな声でケタケタと笑う声が聞こえてくる。

「キキ、キキキキキキ！開幕もしていないと言うのに、随分急な始まりですね。ヒヒ！良いでしょう。開幕直後より鮮血乱舞！救いも娯楽も何もありはしない！ヒヒ、ヒヒヒヒヒヒ・・・。」

・・・狂ってるわね。言葉に脈絡が無さ過ぎるわ。

「つー小町！」

「はいさー！」

小町が鎌で先制するが、彼は黒い何かでそれを受け止める。

「閻魔さま？あれはなんでしょう？」

「あれは、悪性情報と言つらしいです。幻覚の類に近いですが、脳に悪性な情報を流し、腕が切れたと言つ事を脳に判断させ、本当に切れてしまうと言つのです。つまり、あの黒いのは、一種のナイフと思つてくれれば良いです。」

「なるほど、厄介な能力ですわね。対策は？」

「無いです。兎に角、あの黒いのには触つてはいけません。」

触つたらアウト。どれだけ危険な能力なのよ・・・。

「総員！一斉攻撃！」

瞬間、彼に向つてさまざまな弾幕が放たれた。

靈符『夢想封印』

恋符『マスター・スパーク』

彩符『彩雨』

メイド秘技『殺人ドール』

鬼符『青鬼赤鬼』

咒符『上海人形』

六道剣『一念無量却』

華靈『ゴーストバタフライ』

式神『十二神将の宴』

廃線『ぶらり廃駅下車の旅』

兎符『因幡の素兎』

狂視『狂視調律＜イリュージョンシーカー＞』

天呪『アポロ13』

神宝『蓬萊の玉の枝・無色の郷・』

鬼火『超高密度燐禍術』

鴉符『暗夜のデイメア』

狗符『レイビーズバイト』

死符『死者選別の鎌』

審判『ラストジャッジメント』

神祭『エクスパンデッド・オンバシラ』

蛙狩『蛙は口ゆえ蛇に呑まるる』

想起『恐怖催眠術』

呪精『ゾンビフェアリー』  
爆符『メガフレア』

それぞれが自分の得意かつ強力なスペルを放つ。さすがに、これは効くでしょう。幻想郷に居る考えられる力の強いものが一斉に放つスペルを耐えきれるわけがない。彼の様子を窺つて見る。「こんな、誰もが絶望し、死を覚悟する」の状況の中、彼は・・・

「・・・え？ レミコアお嬢様？」

まつたく田の前に迫る弾幕など田もぐれず、ある一点を見つめていた。

「レミリア」

「鏡・・・夜・・・？」

何者かが現れた瞬間、私はすぐさま声がした方を見て絶句した。そこには、あの時、あの死んだ時から姿形が全く変わっていない鏡夜が居たからだ。忘れない、忘れるはずのないその姿を見て、私の思考は止まってしまった。

「そんな・・・まさか・・・。」

「キキ、キキキキキキ！ 開幕もしていないと囁つのに、随分急な始まりですね。ヒヒ！ 良いでしょ。開幕直後より鮮血乱舞！ 救いも娯楽も何もありはしない！ ヒヒ、ヒヒヒヒヒ！ ！」

狂っていた。鏡夜は、昔と同じで、今も狂っていた。が、今はそんな事どうでもいい。今すぐにでも鏡夜の元へ行きたい。そう思い、行動に移そうとするが、それをあの赤い死神が邪魔する。否、邪魔ではない。ただ、鏡夜に攻撃しただけ。しかし、その瞬間、

「総員！一斉攻撃！」

さまざま弾幕が鏡夜に殺到する。その光景が、昔、彼が死ぬ瞬間と一致した。

「き、鏡夜！！」

無駄だとは分かっていたがそれでも彼の名前を呼ばずには居られなかつた。もう、面と向かって言う機会など無いと思っていた彼の名を。

「・・・え？ レミコアお嬢様？」

その瞬間、鏡夜は弾幕に呑まれて行つた。

（鏡夜）

何故、どうして、分からぬ。計測せよ、計測せよ、計測せよ！…

「キ、キキキ・・・」

どうことです。つまり、あれですか？私は、この私は、お嬢様に喧嘩卖つていたということですか？否否否、まさかまさかそんな

はすありません。第一、この土地にお嬢様が……いや、待つて下さい。吸血鬼が居ると云う情報はさつき確認しました。ですが、名前までは確認していませんでしたね。ちよつと、遠いですが、他の方々の脳から情報を引き出してみましょ。……検索結果、この土地の吸血鬼の名前は、レミコア・スカーレットとフランドール・スカーレットの様です。

「ヒヒ……ヒヒヒ……」

「ああ、笑うことしかできません。主に喧嘩を売る従者、ハハハ、お終いです。どう責任取りましょ。あ、そうです。

「こいつ、まだ生きてるの!?

「はい、生きてしまっています。とにかくでせこの腋を露出したふしだらで珍妙な巫女さん(謎)。

「ふしだらで珍妙!?しかも(謎)まで!」寧に言わなくても良いわよ!……あれ?」

「そんなことはどうでもいいのですよ。今すぐ私のド頭をぶち抜いてください。今すぐです。」

「え、ええ?」

話が分からぬ巫女さん(馬)ですね。

「(馬)つて何よ!バカつて言いたいの!?

「YES、あなたはもう用無しです。それなら、そこに居る閻魔つぽい方。」

「ぽいではなく閻魔です!!つて、え?え?」

「む、そんなウソは行けませんよ。閻魔はあなたみたいなちつこい方ではなく、大きいでっぷりとした感じの方でした。まあ、私としてはちつこい方が大変よろしいのですが。」

卷之二十一

「あれ？ 何を落ちこんでいるのですか？ ふむ、 困りましたね。 あ、 ではその加齢臭が凄まじそうな妙齢の方。」

「何ですか？あれ？ わああの緊迫とした空気にしちゃう？」

「私のド頭をぶち抜いてください。」

「人にモノを頼む時は、それ相応の態度があるのでなくて？」

ふむ、それもそうです。

「分かりました。では、かすかなお年寄りの香りをその身に漂わす妙齢で傘を持つている金髪なお方。私の頭をどうぞぶち抜いてください。」

『ブツ！』

「誰今笑つたの!!スキマにするわよ!!それよりもあなた!!その金髪なお方とは誰の事かしら?」

いる金髪なお方の事ですか？」

「・・・ええ、やうやく(エササギ)

「ブッシュ」時代

「・・・あ、あなたはやつぱりいいです。その奇妙な帽子を被つた金髪の方。」

かすかなお年寄りの香りをその身に漂わす妙齢で傘を持っている金髪なお方は何故かワナワナと震えていますが、もう用無しなので良いです。関心が無くなりました。それよりも、今は目の前に居る素晴らしき口りな方です・

「わ、私？」

「そりです。用件は聞いていたと思ひます。わざ、おひつじ。」

「え、えーつど。

頭を差し出し、いつでもぶち抜けるようにします。

「え、遠慮するよ……。

「なんと!? ですが、ふむ、

「なんと！？ですが、ふむ、遠慮されたのなら仕方がありますん。では、そこには居る頭に角が一本生えている鬼っぽい方。お願ひします。」

「え、ええ? と?」

簡単なことです。頭をふた壞せはいいのですから。

八  
二

「死ねませんね。困りました。」

ナニセノ

「ハ、うん?」

・・・今思ったのですが、何か皆さん、啞然としてません？まず、それについての情報から集めた方が良さそうです。

「すみません、ガンキヤノンさん」

「ガ、ガンキヤノン！？」

「はい、で、ガンキヤノンさん。」

「わ、私はガンキヤノンじゃない！？」

泣きだしてしまいました。仕方ない。

「では、そこの鳥天狗さん。」

『何故それだけ普通に呼ぶ！？』

「あややや、それって言われちゃいましたね・・・。」

「で、よろしいですか？よろしいですね。何故、皆さん、あれほど  
唖然としているのですか？」

「あや？それはあなたのがいなりの変わりよつに驚いているんですね  
よ。」

「変わりよつ？ふむ？ちょっと待つて下さい。考えます。」

変わりよつ？ああ、狂った状態からのですか。いや、別段意識して  
る訳でもないのですが、ついハードな戦闘になると狂つちゃうので  
すがそれは一旦心のタンスに仕舞つておいて、何故変わったのかを  
考えましょ。確か、お嬢様に・・・。

「ああ！？」

「あややや！？」

しまった！あらゆる情報が脳を駆け巡りすぎて一番大事な事を忘れて  
ていきました！

「お嬢様！？！」

「ひや、ひや！？」

「申し訳ありませんでしたあ！？」

今までで一番綺麗にきまつた土下座だったと、此処に記しておきま  
しょう。

## 第四話 急展開？お嬢様の為なら世界もひっくり返すわよ（後書き）

タイトルの様に急展開です。いや、元々このように書いといたかったのですがどこで間違ってしまったのでしょうか？永遠の謎です。

## 第五話　「」の土下座の方々は皆、個性的ですね

見事に土下座が決まりました。「」まで綺麗に土下座したのは久しぶりです。

「…………。」

おや？ 何も反応がありません。というか、何故にこんなにシーンとしているのでしょうか？ 分かりません、分かりません、分かりません。

「…………えっと、西さん？」

「…………とりあえず、何故そのように豹変したのか教えて貰えますか？」

閻魔っぽい人が喋りかけてくれました。

「ほいではなく閻魔です！ 何回も言つたではありますか！」「だから、嘘はいけませんよ？ 閻魔はもつとでっぷりしています。あなたの様な小柄な方ではありません。」

「うるさい！！ 小柄って言わないでください！！ それと、閻魔は複数いるのです！だから、私の様な小さい閻魔もいるのです！！」「認めましたね？ 素直でよろしいです。」

なでなでしてあげましょ。

「…………はっ！ あ、頭を撫でないでください……。」

「おお、つい。で、なんのお話でしたっけ？」

「だ・か・ら！何故いきなりあなたは戦闘態勢を解いたのですかと聞いているんです！！」

「ふむ、長い説明が要りますか？短い説明の方が良いですか？」

「長いほうで。」

「わかりました。あれは、私が16歳のころ

『長すぎる……？』

「い、一体どこまでさかのぼる気ですか！」

「え？長く説明しようと言つたので頑張つて長くじょうとしましたのですが……。」

頑張りうとしました。執事たるもの、要求にはお応えする必要がありますので。

「そこは頑張る所ではありません！！」

「あ、そうですか？ならば、普通に説明します。要するに、お嬢様が居たからです。」

「今度は省き過ぎです！…ああもう…あなたと言ひ人は融通が利きませんね…！」

む、融通が利かないと言われてしまいました。私は言われた事をやつていただけなのに。

「いいわ、私が聞くわ。」

「大丈夫ですか？かなり個性的な人ですよ？」

「ええ、知っているわ。それで、鏡夜。何故、私に敵意を向けたのかしら。」

「誠に申し訳ありませんお嬢様。執事にあるまじき行為でした。言い訳する気は御座いません。どうぞ、殺すなり、抹殺するなり、惨殺するなり、暗殺するなりしてください。」

「殺すしか選択肢がないわね。いいわ、後で私の部屋に来なさい。」「・・・わかりました。」

「ちょっと待ちなさい。話に全く付いていけませんわ。説明を要求します。」

「・・・分かつたわ。まず、今回の事件の犯人は彼、十三夜鏡夜。昔の私の執事よ。」

『なつ！？』

「む？何故に驚いているのでしょうか？そんなに意外ですか？」

「で、鏡夜が豹変した理由は単純に私と私の知り合いを敵に回したと知ったからよ。」

「はい、その通りです。主を敵に回す従者など、従者失格です。ですから、即刻あなた方を殺すのを止め、こういうことになつたのですよ。」

「初めからそう言えば良かつたではありませんか・・・。」

「なんにせよ、幻想郷は安泰、と言つことによろしいですか？」

「おお、此処はパラダイスですね。今度は園児服みたいな服を着た子供が現れましたよ。良いですね、良いですね、良いですね！」

「ええ、そうよ。鏡夜が私の敵になるなどあり得ないわ。」「その通りです。安心して下さい。」

「はい、これで一件落着ですよー。ほら、皆さん帰つて行きますよ。ふー、よかつたよか

「ちょっと待つて下さいーー！」

解決したと思った矢先の荒声。何事でしょう？

「皆さん目的を忘れていませんか？私たちの目的は、彼の捕縛ですよ！？」

「え？ そうだったのですか？ ですが閻魔さん（仮）。私は捕まえられませんよ？ 私の能力を知つていてるでしょう？」

「・・・いえ、知りません。」

「ふむ、知りませんか。アホですね。」

「なつ！！？」

「まあ、教えても不利も無いので教えておきます。私の能力は『情報操る程度の能力』です。何が出来るとかは全部は教えませんが、世の中、情報で出来ています。」

「はい？」

「体の構造も、情報で知つてているでしょう？ 実際に自分の体の中身を見たという方はかなり少ないはずです。ああ、レントゲンとかは無しですよ。生でです。今見ている光景も脳に情報としては言ってきて初めて認識できます。私はその情報を操れるのですよ。つまり、今あなたが私を私と認識しているかもしませんが、それが全くの別人かもしれないということです。」

「・・・反則じやないですか。じゃあ、何故突然現れたりできるのですか？」

「ああ、あれはまあ、頭の賢い人なら分かるかもしませんね。分かっている人、薄々感ずいている人、拳手）。」

「・・・おお、割と少ないですね。加齢臭の方と、ガンキヤノンさんと、蛙の帽子を被つた素晴らしい方と、お嬢様、パチュリー様、あと、アポロっぽい人と、死神の方と、園児服着た素晴らしい方ですか。存外、

「この土地の方々はアホなのですね。」

『何！？』

「息はピッタシ。それど、頭はガッカリですね。やれやれ。」

「何この人、すごくむかつくんだけど? 殴つていい? ねえ、殴つていい?」

「ん? 巫女さん(超馬)が怒っていますよ? 何故に?」

「殴つても良いですが、その場合、痛いのは自分だけですよ?」

「それで苛々が消えるのなら十分よ!」

「バゴン! -!」

「～～～～～～つ! -!」

「だから言つたのですが・・・まあ、私の所為でもあるので痛みは消しておいてあげます。」

「・・・あれ? 収まつた?」

「ああ、今のが単純に分かりやすい私の能力です。まず、私の体の内部構造を堅くして、それをこの巫女さん(笑)が殴りました。」

「(笑)つて何よ! -?」

「で、巫女さん(煩)は痛いと言つ情報を神経から脳に送りました。私がそれを操り、痛くないということにしたのです。まあ、ダメージは残りますが。ああ、私が発生する理由でしたね。単純なことです。私に関係のある話、もしくは噂がされている所なら、私がどこにでも行けるからです。まあ、その場合は私自身を情報にするので、留まつていられるのは良いところで一週間、普通で一晩、悪くて一時間と言つたところですが。」

「いや、私はどうこうした仕組みで発生するのかを聞いたのですが・・・?」

「ふむ、それは考えた事ありませんでした。なにせ、やうつと思ひたら出来ましたので。」

『はあ?』

はあ？と言われましてもね。実際そんなものだと思うのですよ、能力なんて。ほとんどの人がやつてみたら意外と出来たみたいな感じでしょう。そんなものだと思うのですけどね。

「で、そんな私を捕まえたくても捕まえられない閻魔っぽい人にとても良い話があります。」

「で・す・か・ら！ ぽいではなく閻魔ですってば！！」

では、閻魔（仮）で行きあし、うそそれで、良い話と言ふ。このことは、単純明快。こんなことも思いつかない閻魔さま（仮）はとても頭が固いということは、一畠置いておきまして、上方には“私を捕まえる”ことは不可能なので、この土地にて監視する”とでも言つておけばいいのです。

「そ、その様なこと・・・。

ならば、捕まえてみますか？絶対に逃げ切ると誓しますよ？」

小畠 なんとかして下さい

おお、遂に部下に頼りましたね。

「えへ、無理ですよ。だって、彼、出鱈目なぐらい強いんですよ

「あたし」はとてもとても、「

おおつと?突つ込んでおおしたよ?

「うめら」

手をジタバタさせて必死で私を捕まえようとしていますか・・・

「ふむ、悲しきかなこの身長差。まあ、私に肉弾戦を挑んでも良いですが、勝てますか？あなたが。」「私をバカにしているでしょうー？」

「否、ただ、可愛いですねー、とは思つていますよー。」「ななな！？」

「まあ、同時に、五月蠅いですねー、とも思つていますが。」「五月蠅い！？」

「ま、そういうことで諦めてください。元々、私の目的はお嬢様の搜索ですので。目的を達成した今、私はお嬢様に仕えるつもりです。あ、お嬢様。」「何？」

そうでした。まだ重大な事を聞いていませんでした。

「また、お仕えしてもよろしいでしょうか？」

「・・・ええ、許可するわ。」

「ありがとうございます。あ、そういうわけなので、もう私はこの土地を殺しませんので一件落着ですよー。閻魔さん（子）もお帰り下さい。」

「（子）ってなんですか！？まさか、子供と言つ意味ですか？」

「それ以外何があるのですか？」

「むきいー！もう怒りましたよー！」

「既に怒つていましたけどね。」「

「・・・ハア、もう良いです。疲れました。あ、そうです。言い忘れていましたが、あなたをこの土地で監視するに当たり、あなたは何らかの仕事をしなければいけません。」「

「・・・それで？」

「あなたは何が出来ますか？」

「何が、と言われましても・・・、私は執事ですよー。執事しかできません。」「

「では、それで。要望があつた場所の執事をやつて下さい。もちろん、拒否権はなしです。期間はそうですね・・・、一週間でどうですか？要望があつた日から一週間です。」

「ちょっと待ちなさい、それだと、私の執事である時間が格段に少なくなるのだけれど？」

「それはしようがないでしょ。」

「・・・却下よ。鏡夜は私の執事なの。」

「それだと、地獄に戻つてもらう必要がありますが？」

・・・どうやら、結構面倒なことになつてますね。なるほど、私の罰のお話ですか。

「お嬢様、私は別に構いませんよ？」

「鏡夜！？私以外を主とする気？」

「いえいえ、私の主は私が死ぬときまでずっとレミコアお嬢様ですよ。ですが、閻魔さまが言つように、私も私で罰を受けなければならぬようですね。そうですよね？」

「はい。・・・あ、今閻魔と認めましたね？」

「なら、私はその罰を甘んじて受けます。大丈夫、一週間働いた後は、一週間休みますし、最優先はお嬢様ですので。」

「・・・鏡夜がそう言つなら、それでいいわ。」

「ありがとうございます。では、解散しあやつてください。わたくし、どうぞ。」

「さつきから思つていたのだけど・・・。」

『何でずっと仕切つてゐの！？』

おお、ばれました。

「息はぴつたりですね。まあ、良いではありませんか。どうぞお帰り下さい。」

ふつぶつ不満タラタラで帰つて行きましたね。うん、よかつたよかつた。

「咲夜、片付けておきなさい。鏡夜は付いてきなさい。」

「「かし」」まつました。」

さて、お嬢様の部屋に着きました。

「何も変わつてませんね。」

「え？ まだ私の部屋があるのでですか？」

「当たり前よ 錆夜の部屋を 無くす証なししやなし  
たという唯一の証なのだもの。」

「…………ありがとう、アーリアさん。」

その時、突然腰の辺りに何かが抱きついてきました。小さい、とても小さい体です。

「お嬢様……？」  
「ずっと、会いたかつた。あの時、私も何か出来たんじやないかつて、ずっと思つてた……。」

「お嬢様・・・？」

震えていました。更に、お嬢様は泣いていました。恐らく、私が死んでからお嬢様はずつと自分を責めていたのでしょう。・・・そんなことしなくて良いのですが。

ポンッとお嬢様の頭に手を乗せ頭を撫でます。

「御自分を責めないでください。私が死んだのは私の所為なのです

から。お嬢様が自分を責める所ではありません。それと、私も会いましたか？ですよ。会うのに、200年も掛かってしまいましたが。

「いい、それでも、会いに来てくれたから。」

「これからは、滅私奉公、粉骨碎身、お仕えさせていただきます。」

「ふふ、期待しているわ。」

・・・沈黙。ですが、それはあまり氣まずいものではありませんでした。

「お帰りなさい、十三夜鏡夜。」

「・・・ただいま帰りました。レミコアお嬢様。」

## 第五話　「お嬢様の方々は皆、個性的ですね（後書き）

お嬢様キャラブレイク？です。カリスマではありません。キャラブ  
レイクです。

## 第六話 邪な考えなどありませんよ

従者の朝は早い。そう、執事、メイド関係なく朝起きる時間は早いでしょう。何故なら、主が起きたその時には、少なくとも朝食は完璧に準備しておかねばならないし、完璧で瀟洒な従者を目指すのなら朝食以外の事も主が起きる前にすべてこなしておく必要がある。無論、私とて従者の端くれ。主よりも早く起きるのは当然です。ですが、私は断言します。

私は、お嬢様が起きるまでは働かない！！

はい、と言つわけでお嬢様が起きるまでは僕は一切働きません。否、働かないのではありませんね。私はずっと、お嬢様の起きるまではつとその傍らに立っています。理由？主が起きた時に誰も居ないと言つのは中々失礼なことではありませんか。邪な発想？あるはず無いじやあつませんか。

「・・・」。

「クハツ！？」

か、可愛すぎますよ、お嬢様！！おつと、いけない。鼻から忠誠心が。抑えるのです、忠誠心を外に放出してはいけません。

「 ハハ・リア・フーフー 」

「ブフッ！？」

□から！□から忠誠心が！－くつ、お嬢様め！これは私を陥れる為の計略ですね！？さすがお嬢様汚い！！ですが可愛い！！可愛いすぎますよお嬢様！－－－」の寝顔だけでも「飯三杯はいけます－－・・・じゅるり。

「何をやっているの?」

「おおつと、危ない所でした。ん？あ、咲夜殿ではありますか。どうしました？」

「可い……お嬢様の憂鬱を……焼き付か「死」が

う！？いきなりナイフを投げないでください。ビックリするではありますか。」「

「お嬢様の寝顔を堂々と……それが従者のあるべき姿ですか？」  
仕事もしないで。」

一む、なら反論せていただけます。ええ、いたたきますとも。むしろ、お嬢様が起きた時、誰も居ないと云つのは明らかに失礼なこ

「それはそうだけれど、だからってずっと見ていたと言つの？それに、お嬢様が起きたら真っ先に私が気付くから問題ないわ。いいからさつさん仕事して来て頼む。

仕事・・・？ああ、仕事ですか。

「安心を。朝のお仕事は既にほぼ全て終わっています。」

「いやって終わらせたの？」

したよ。それは・・・。」「

「うへん……。」

おおつと、お嬢様が起床しましたね。吸血鬼なのに朝に起床とはも  
のすじく不健康ですね。できれば止めて頂きたいのですが、お嬢様  
が好き好んでやっている事らしいので（昨日、パチエ様に聞きました。）それを意見するはどうかと思ったので意見はしません。

「おはようござります。着替えをしますね。」

指パッチンして、即座にお嬢様のパジャマと私服の立場を逆転させ  
ます。ああ、私は基本、知つていれば何でもできます。情報を操る  
のですから、私が知つている情報は何でも操れます。つまり、お嬢  
様の私服がどこにあるのかさえ知つていれば、パジャマと瞬時に入  
れ替えることなど造作もありません！……下着もまた同様です。  
おつと忠誠心が。いけませんね、最近と言つか昨日から忠誠心がダ  
ダ漏れになっています。困りました、困りました、困りました。

「……早いわね。」

「お褒め頂き恐悦至極です。朝食も用意してあります。……お一  
い、レン。入つてきてちょ。」

『ちょ！？』

「分かつた。」

レン……ああ、私の使い魔です。今は人間の形をしていますが本  
当の姿は確か、あれ？何だつたでしょ？猫？犬？鳥？虫？否、虫  
はありませんね。何らかの動物だつた気がするのですが……まあ、  
私も若かつたので何か変なのにしてしまつ。覚えてませんが、  
まあ、とりあえず私に忠実な使い魔です。会つのはとつても久しぶり  
でですがね。私が気まぐれに作った情報体ですから、当然、肉体は  
所持していますし、私が消滅しても体を維持出来る様になつていま

す。ぶつちやけ、私よりもその辺りは頑丈に出来ています。・・・  
何故、レンは頑丈に出来て私自身は何故出来ないのでしょう?あ、  
分かりましたよ。私と言つ器・・・と言つた情報の容量が大きすぎ  
てその辺負担するのですね。レンは強いですが、私ほどではないで  
すし、現界が容易いのでしょうか。よし、スッキリ。

で、レンとは私が現界する度に接触します。お互い、どこに居るか  
分かりますしね。そして、私は今がどういう世の中なのかを知るの  
です。それで、私はそれにあつた噂を流せるというわけです。因み  
に今回はこの場所が結界に囲まれていたのでレンを呼ぶのが遅くな  
りました。まさか、一回分解してこちらにて再構築させる羽目にな  
るとは思いませんでした。はい、説明終了。

「今日の朝食は、まあ、朝と言つわけで軽めの物にしました。血入  
リスープと普通のパン。デザートに・・・お嫌いでしょうがヨーグ  
ルトです。お飲み物は紅茶です。」

「うつ、ヨーグルトは食べなきやダメ?」

「駄目です。しつかり食べてください。」

「紅茶には何も入つて無いわよね?」

「え・・・?いや、普通に茶葉が入つていますけど?」

「そうではなくて、変な物は入れてないわよね?」

「へ、変な物・・・?ちょっと待つて下さい。レン、何か変な物入  
れた?確かに、紅茶はお前が担当したよね?」

「別に大したものは・・・あ。」

「何?」

「B型の血を入れた。それ以外は何も。」

「・・・だそうですが、何か問題はありましたか?」

「いいえ、無いわ。むしろ完璧よ。」

そう言って紅茶を飲むお嬢様。実に満足そうです。

「・・・美味しいわ。」

「美味しいですってよ、レン。良かつたですね。」

「・・・。」

あ、相変わらず私以外にはツーンとしていますね。まあ、良いでしょ。」

「では、私は少し用事があるのでこれにて。レン、行くよ。」

「うん。」

一礼して部屋を出ます。数歩歩いた先に・・・

「咲夜殿？」

「・・・あなた、いつの間に朝食なんて作ったの？」

「レンとの共同作業ですが、そうですね・・・日が昇る前には作り終えました。それがどうかしました？」

「・・・あなた・・・いえ、鏡夜、鏡夜は・・・いつ眠ったの？」

「睡眠ですか？私は睡眠など取つていませんよ。」

「え？」

「睡眠は必要とする体ではないので、睡眠は取つていません。」

「・・・なら、その間ずっとお嬢様の傍に？」

「？そうに決まっているではありませんか。」

「・・・そう。」

「？？？おかしなことを聞く咲夜殿ですね。そんな当たり前の事をどうして聞くのでしょうか？」

「では、用事があるので。あ、悪いですが食器、片付けて貰つて良いですか？」

「分かっているわ。実質、今日はまだ何もしてないわ。むしろ、

「これ以上仕事を取られても困るのだけど？」

「ふむ、それもそうですね。では、またいつか分担でもしまじょ。では。」

目指すは大図書館です。もちろん、お飲み物も持つていきますよ。あと、カロリーメイトも。

「・・・狂つてるわね。良い意味でも悪い意味でも。」

後ろで咲夜殿が何か言つていましたが、生憎聞きとれませんでした。

「「「」」は相変わらずす」」こですね。」

現在、私とレンは大図書館内部に居ます。

久しぶりに（当たり前か）来てみましたが、昔よりも増えてますね、本の量が。というか、埃っぽいですね。こんな環境に居るから喘息が直らないのではないか？

「・・・鏡夜。」  
「うん？」

呼ばれて見たのでそちらを見てみたらレンがうずくまもじもじしていました。・・・ああ、そういうことですか。

「私が許可を取つてくるから、読みたい本読んできても良いよ。」

「うん・・・・・！」

タタタッと本に小走りでとても嬉しそうに向かって行きました。確かに、レンは本が好きでしたね。

「さて、パチエ様はどうぞよいか・・・・・？」

うーん、いませんね。本当にどうぞよいかと迷いましたが、やはり過ぎです。

「・・・・・ゆ。」

「・・・・ん？ 何か聞こえましたよ？」

良く耳を澄ましてみます。

「むわわわ～・・・・・。」

この声は間違いない！パチエ様です！下の方から聞こえましたよ？と、そこで私の眼に映つたのは、不自然にこんもりしている本の山です。まさかと思い、それを崩していくと・・・・・。

「むわわわ～。」

パチエ様が下敷きになっていました。

「大丈夫ですか？」

「あ・・・鏡夜？死ぬかと思つたわ・・・・・。」

「取り合えず、出しますね。」

「お、お願ひ・・・・・。」

そんなこんなで、パチエ様を救出しました。

「で、どうしてあのよつなこと?」

「読んで積み上げた本たちが一気に落ちてきたのよ。ホント、危なかつたわ。」

「いや、片付けましょ。・・・。」

先ほども言いましたが、だから喘息が治らないのではないのでしょうか?

「それは小悪魔の仕事よ。私のやることでは無いわ。」

「それでも、少しごらい片付けましょ。そんなことでは、小悪魔殿がやさぐれてしまこますよ?」

「うう・・・、あ、そ、そつ並みれば鏡夜は何故ここに来たのかしら?」

「話を思いつきり逸らしましたね。まあ、いいです。お飲み物をお持ちしました。何が良いですか? コーヒー? 紅茶? 緑茶? 種類は取り揃えています。」

「紅茶が良いわ。」

「おや、コーヒーは飲まないのですね。」

「ええ、苦いもの。」

「あの苦味が良いのですが・・・まだお子ちゃんが苦ですね。」

「なつ!?」

「そんなお子ちゃんが苦なパチエ様には私がリミックスフルーツジュースをプレゼントです。」

「要らないわよ!—それにお子ちゃんが苦つて何!—? コーヒー飲めないのがそんなにいけない事なの!—!?」

ピーピー五月蠅いですね。

「因みにミックスしたのはドリアンとパパイヤ、パッションフルーツです。」

「なんで臭いフルーツばかりなの！？余計要らないわ！！」

「あ、そうですか。では普通にドリアン入り紅茶でも。」

「ありがちついでいやいや！普通じゃないわよ！？ドリアンが入ってる時点で普通じゃないわよ！？！」

「おや？まさかパパイヤをご所望ですか？通ですね。」

「どこからその結論が出たの！？所望していないわ！？」

文句が多いパチエ様ですね。いつからこんなに我儘になってしまつたのでしょうか？私はとても悲しいです。

「鏡夜……。」

「ん？ああ、レン。どうかした？」

「喉渴いた。」

「これでも飲みます？」

渡したのはミックスジュース。

「……臭い。」

「味は？」

「……ん、おいしい。」

「でしょう？あ、パチエ様は紅茶でしたね。……どうぞ。」

「さつきとは随分違うわね……まあ、ありがとう。とにかくで。」

「なんでしょう？」

「その子は誰？」

「レンですか？ああ、私の使い魔……いえ、子供ですね。」

その瞬間、パチエ様は本を落とし、私の背後からはガシャーンと何かを落とした音がしました。後ろを見てみると……

「あれ？お嬢様？」

「・・・鏡夜、今の話、く・わ・し・く！説明なさい。」

「は・・・?」

— そうね鏡夜、『子供』とはどういう意味なの?』

子供…………？ああ、そういうことですか。

「レンは私が作つた使い魔なので、世間的に子供という事にしてあります。お嬢様とパチエ様が危惧している事は一切ございません。

「レジン」の歴史

「う？」

「……要するに、そのレンとやらは鏡夜の使い魔で良いのね？」

はい、その通りです。

金刀が机に錆石の傷い廢が山都道にかし詰に山にかし机に  
スルソバノ。

— . . . .

またシーンとしてますね。

「すみません、レンは何故か私以外にはこうなんです。どうかご容

赤を

「…まあいいわ。それより

「あら、ブン屋じゃない。咲夜は何してこらのかしら? 侵入を許すだなんて。」

「いえ、お嬢様。どうやらそのブン屋は鏡夜に用事があるようでしたので招き入れました。よつて、侵入された訳ではありません。」「やつ、で？用事つて何かしら？」

お嬢様、それは私の台詞です。

「鏡夜さんに早速お仕事ですよ。場所は地底ですが。」

「仕事？ああ、あの出張執事ですか。もう来たのですか、ていうか、何故あなたが私に報告してくるのですか？」

「あ、申し遅れました。私は今日から閻魔さまにあなたの仕事についての報告を任せられたのです。これからは私が報告させていただきます。よろしくお願ひします！」

「ええ、よろしくお願ひしますね。」

営業スマイルならぬ執事スマイルで対応します。

「つ、で、では今回の執事としてのお仕事の説明をさせていただきます。今回の依頼主は古明地さとりさんという地霊殿の主です。内容は・・・ペットのお世話、仕事の手伝い、朝、昼、夕の食事準備、後は身の回りの世話ですね。」

「なるほど、把握しました。で、いつからですか？」

「ええっと、それは・・・あ。」

「はい？」

「今日から、です。」

事はいつも突然ですね。



## 第七話 人をからかうのは私の趣味です

ふむ、あ、どうも皆さん、鏡夜です。困ったことに地靈殿とやらで今からお仕事の様です。いやはや、この土地・・・幻想郷でしたか?ここはアレですね。理不尽と言つたか、何と言つたか。

「さよ、今日ですって!? いくらなんでも急過ぎるわ!-!」

はい、急過ぎます。ですが、まあこれも私に課せられた義務ですから、地獄の良いなりとは少し癪・・・いえ、はらわたが煮えくりかえるほど癪ですが、仕方ないでしょ。

「お嬢様、申し訳ありませんが、ちょっと行つてきます。」

「鏡夜!?」

「これは私の義務です。お嬢様の元でお仕え出来ないのが大変心苦しいですが、私がこの土地に残るためにも、必要なことですから。ですが、私の優先順位は常にお嬢様がぶつちきりのトップですので、何かありましたらそうですね、私の話でもしてください。すぐに駆けつけますから。ええ、それはもう、刹那の如く、突風の如く、脱兎の如く。」

「・・・鏡夜がそう言つたら良いわ。でも、一つだけ言わせて。」「何で?」

「脱兎は違うわよ! 逃げてどうするの!-!」

「おお、時間差ツツコミですか。大して面白くもなんともないです。」「悪かったわね!-!」

「 プイッ とそつぽを向いてしまいましたよ。拗ねてしましましたか。ふむ、よいしょしてみましょ。」

「冗談ですよ。斬新で、私の度肝を抜きました。」「それはあまりのつまらなさを二つか三つら？」

「それはああうのい琳りなれにかしら？」

「ほい・・・・・いいえ、その様なことは御座いませんよ?」

「今『はい』って言ったわよね？ねえ、言ったわよね？」

「何のことでしょう？私にはお嬢様が何をほしいしているのか全く分かりませんが？」

「所々失礼ね！？礼儀はどこにいったのよ！？！」

「・・・あ、そろそろ時間なので私はこれにて。

「わよー！」

分かりました。一々だけ処理していきまし

「よく考えてください。全て『嘘』なので、つまり、画面へなかつてはいけないのです。」

「…?」

では、行<sup>フ</sup>て参ります。私が居<sup>リ</sup>ない間も、好き嫌いはしてはいけ

1074

「失礼します。」

一礼し、執事スマイルで退室します。

「・・・あればするいんじやない?」

「ずるいわね。」

「ずるこですね。」

「あ、鏡夜さん！待ってくださいーー！」

現在、私は地底とやらに向かって移動中です。メンバーは私、レン、そしてあややさんです。案内役らしいですよ。私には必要無いのですがね。私の噂、話をしているところには瞬間に移動もとい発生できるので。・・・まあ、噂されてなければ意味無いものですがね。しかも噂されているかされていないかはなんとなくわかるだけでものすゞくアバウトです。戦闘面ではこの上なく強い能力なのですけど、生活面ではあまり役に・・・立たないことも無いかもです。

「じーです。」

「・・・神社？」

どう見ても神社です。何々？博靈神社？ああ、あちらの世界にもありましたね。ものすゞく古ぼけでましたけど。ですが、良い隠れ家でした。私が発生すると、死神が五月蠅いのですよ。千切っては投げ千切っては投げを繰り返してましたよ。・・・あ、比喩ではなく真面目にです。

「とりあえず、上がりましょう。」

「階段ですか？めんどいですね、飛べるのなら飛びましょう。・・・もしや、ダイエットですか？」

「違いますよ！女性にそういう事を言つてはいけません！――

「まあ、その必要は監禁ですね。レン、おいで。」

「ん。」

レンを抱き上げ、そのまま跳躍で階段の一番上まで飛びます。この

ぐらこなら、跳ばずとも余裕ですね。因みに何故抱き上げたと言つと、単純に私の趣味ですが何か？

「あややさん、早くして下れー。」

「あ、待つて下れーーー。」

全く、遅いですね。いや、脚は速このじょうが、こひ、脳内の状況整理からの行動が。

「で? どこから行くのですか?」

「あ、あの穴からですか? 成程、では早速

「・・・鏡夜。」

「ん? 何かな?」

「・・・お参り、したい。」

「ん? お参り? いいよ、はい、五円玉。」

「ん。」

私から五円玉を受け取り、テツテツとお賽銭箱に小走りで走っていくレン。つと、和みます。

「・・・あの子には随分甘いんですね?」

「そりやそうですよ。長い付き合いでですし、何より、私が創った最初で最後の子供ですか? 甘やかしますし、可愛がりますよ、全力で。

今存分に構つてあげるのですよ。」

「ゆとりの極みですね! ! !」

「何をおっしゃいます。レンは良い子ですから、私が甘やかしても何も問題ありません。むしろ、今まで碌に構つてあげれなかつた分、今存分に構つてあげるのですよ。」

「・・・鏡夜、終わつた。」

「ん? 終わつた? じや、行こ? うか。」

「ん。」「

「あ、あややさん。」ソラがどうがどうしゃいました。これからもよしへお願ひしますね？」

割と誠意をもつてお願いしています。執事スマイル付きですが。

「は、はい、よしへお願ひします。」

「では。」

穴に向かってダイブします。・・・おお、思ったよりも深いですね。

「・・・・・あの笑顔は反則ですよ。」

ふむ、深い。そして不快。なんですかこのレンの教育上よろしくない気配は。まったく、これでレンが悪い情報を体内に取り込んでグレたりしたらどうしてくれるのです。地底を殺しちゃいますよ？レンの書になる物はすべてが削除対象です。

「・・・」  
「いい、やだ。」

「ああ、大丈夫？こんな悪質な情報は体内に取り込んじゃダメだからね？私の悪性情報ぐらい性質タチが悪いからね？」

「ん。」

よし、これで良いでしょ？あ、もう予め言つたりますけど、私

は子煩惱ですかね？親バカですかね？子供のためなら割と何で  
もしますからね？

「・・・レン、思った。」

「何を？」

「落ちる必要、ある？」

「・・・無いですね。ぶつちやけ、神社まで歩いてきたのもあややさ  
んが居たからです。私の発生は、他人を巻き込めませんからね。ま  
あ、私が居るところに呼ぶことは可能ですが、その場合は、その  
呼ぶ人がどこに居るか正確に理解していなくてはいけません。緯度  
経度、部屋のどこに居て、ドアから何メートル離れているかなどな  
どを正確に。使えません。話を戻して、あややさんが居たから歩い  
たのであって、レンとなら発生出来るのです。レンはちょっと珍し  
いタイプでして、複数の能力を持つています。その中に、『適合す  
る程度の能力』と言つものがあります。これ、戦闘面では全く役に  
立ちませんが

全くではないですね

生活面ではとても便  
利でして、その気になれば、火星だろうと、水星だろうと、太陽だ  
ろうと適合してしまえば、その環境に合わせて生きて行けるよう  
になります。ですが、そのためにはその環境の情報を取り込み、適合  
しなくてはいけなくなります。ですから、私はさつき『取り込むな  
』と言つたのです。まあ、こんな環境に適合する必要も無いのです。  
伏線回収です。いえーい。で、その能力で私に適合して、見事に私  
と共に、噂の現場に発生出来るわけです。因みに、レンの能力は複  
数と言いましたが、その中には『情報を少し操る程度の能力』もあ  
ります。無ければ、『適合する程度の能力』なんて宝の持ち腐れで  
すからね。

「じゃあ、ひとつと地靈殿とやらに移動しますか。レン、行くよ？」

「うん。」

噂は・・・それでますね。内容は・・・あ、遅刻らしいです。ではドロン。

「おはよ〜!」ぞこます。十三夜鏡夜、只今参上いたしました。」

おお、驚いてますね。まあ、当然目の前に現れれば驚くでしょう。前触れ無しですから。ドロンと言いましたが、実際煙など出ていませんし。

「・・・お待ちしていました。ずいぶん遅かつたですね?」

「道中が歩きでしたので。文句のほどは責任者に言つていただけると助かります。」

「わかりました。射命丸さんにそう言つておきます。」

「では、まず自己紹介から、私の名前は先ほども言つたように十三夜鏡夜。年齢300歳ぐらい、趣味、お嬢様にお仕えすること、子供を愛でること、レンの行動を観察すること、人をからかうこと、特技、関数計算が暗算で出来る事、パソコンよりもハイスペ

「ちょ、ちょっと待つて下さいー誰もそんなこと聞いていませんよ!?」

「・・・あ、私としたことが大変失礼いたしました。」

「いえ、分かつていただけたなら」

「私のスリーサイズは」

「そんなこと聞いてませんよーどう解釈したらスリーサイズを言つ結論に至るのですか!?」

「違うのですか?」

「私の事を何だと思つてます?」

「なら、あなたのスリーサイズを。」

「ななじゅ 何言わせているのですか!セクハラですよー。」

「言う方も言う方だと思ひます。」

「つ、た、確かにそうですね。少し落ち着きます。」

「・・・ふむ、78ですか。」

「何で知っているんですか！？」

「え？何のことでしょう？私は唯、78と言つただけなのですが？」

「あつ・・・」

「まあ、良いのではありませんか？78、可もなく不可も無く、普通ですよ？」

「やっぱり確信犯ではありませんか！！」

「え、今更ですか？」

「（こ）の人マジむかつきます・・・！」

「・・・鏡夜、話が進まない。」

「おおう、危ない危ない。弄るのが面白過ぎてつい遠回りしてしました。」

「では、おふざけはこの辺りにしておきましょう。御主人、早速仕事をしたいのですが、どうすればよろしいですか？」

「え、あ、はい。とりあえず皆に紹介したいので、客間に場所を移します。」

「分かりました。そこで、私の取り扱い方でも説明させていただきます。」

「さとり~

「彼は変わった方ですね。初めて会つた時の印象とは全く別人のようです。いえ、アレが素なのでしょうか？」

「それでも、彼は人をからかうのが好きなようですね。フフフ、そうはいきません。私もからかうのは好きですが、からかわれるの

は嫌いです。先ほどはやりませんでしたが、次は能力を使って逆にからかってあげましょ。・・・突然真面目になるのも素なのですか？

### （鏡夜）

客間です。紅魔館に勝るとも劣らないですね。さすが地靈『殿』です。

「では、まずはこちらから。改めて、この度あなたにお仕事をお願  
いした、古明地さとりです。こちらは私のペットで・・・。」

「火焔描燐だよ。よろしくねお兄さん。気軽にお燐つてよんでね。」

「靈鳥路空だよ！—靈はお空つて呼んでるよー。」

「です。あ、お仕事の項目にペットのお世話とありましたが、当然  
お燐とお空の世話もしてもらひのでよろしくお願ひします。」

「分かりました。・・・成程、火車と地獄鴉・・・ん？ああ、八咫  
鳥もありますね。はい、よろしくお願ひします。ではこちらも改め  
て、十三夜鏡夜です。で、」あらが・・・。

「・・・・・」

「おやおや、ツーンとしちゃつてますね。困りました。」

「せめて、自己紹介はしてくれないかな？ほら、カタカナ二文字だ  
よ。」

「・・・レン。」

「です。・・・あ、種族は言つた方が良いですか？先ほどは私が勝  
手に調べてしましましたが、あなた方は分からぬでしょ？」

「うにゅ？お兄さん人間じやないの？」

「人間の匂いがするけど。」

「おお、人間に見えますか。それは重量。ですが、すみません、人間ではありません。そもそも、私の事についてあのちつこい閻魔殿から聞いているでしょう？」

「ちつこい……。」

ん？御主人が下を向いてフルフル震えていますよ？笑っているのでしょうか？

「そう言えば、そうだね？」

「うにゅ？話？なんの事？」

・・・ああ、そう言えば、まとめて言つてしまえばこの人は鳥でしたね。つまり、鳥頭と。

「まあ、どうやら頭の弱い方もいらっしゃるようなので、簡単に言つてしまつと、私は情報体です。この体は情報の塊と言いますか、何と言いましょうね。魂を見た事ありますか？」

「あります。」

「あるよ。」

「おいしいの？」

・・・あるとしましょう。

「あの状態から、昔の私の姿形を一から再構築したので、この肉体は私が作り上げた情報体です。まあ、人間の肉体なので強靭ではありません。・・・今は、ですけど。」

何と言えば良いのでしょうか？サイボーグとは違いますし、人造人間でもありません。・・・情報統合思念体を人型にしてみたという

感じでしょつか？違いますね。まあ、肉体があるので、生き物と言つジャンルで問題無いでしょ。

「で、レンはと言いますと、私が作ったので情報体でもいいのですが、ちょっと違いますね。一からではないので。種族としては、情報体＆合成獣キメラです。今は人の形をしていますけど。・・・ところで、レンはなんのキメラでしたっけ？」

「・・・分からぬ。」

「自分の事なのにですか！？」

「ふむ、まあ、そんなものでしょうね、私達など。では、自己紹介も終わつた・・・あ、まだですね、そちらの方の血口紹介が終わつてません。」

「ピッ、と密間（と言つてもかなり広いです）の柱を指す。レンと私以外気付いてないようでしたが、どういう事でしょう？」

「なつ、こいし！何時帰つてきたの？」

「あちやー、ばれちやつたか。すいにねお兄さん。え？何時帰つてきたか？さつきだよ、お姉ちゃん。」

どうやら姉妹のようですね。

「ふむ、『こいし』と『お姉ちゃん』という単語から、あなたは古明地こいしですね？はい、分かりました。では、早速本題に

「ちょっと待つて。何でお兄さん、私に気付いたの？」

「なんですか？・・・では、逆にお聞きしますが、あなたは何か特別な事をしていたのですか？ただ普通に扉から入り、その柱にもたれただけの様に私は思いましたが、レン、どう？何か感じた？」

「・・・ん、能力。」

能力・・・能力ですか。

「能力ですか。分かりました、では、早速本題に  
「だからちょっと待つててば！何で私に気付いたの？普通は気付け  
ないんだけどさ。」

「なら、普通ではないのでしょうか。では、早速本題に  
「私の能力は『無意識操る程度の能力』。ねえ教えてよ、何で私  
に気付けたの？」

・・・中々本題に入れません。この娘はどうやら、興味関心のある  
事は積極的に聞くようですね。まあ、良い事ではありますか？  
「無意識操る、成程、ならば効きませんよ。私に無意識などあり  
ませんから。」

「嘘！生きているなら絶対に無意識はあるはずだよー！」「  
・・・まあ、そうでしょうね。ですが残念、私は既に死んでいます  
し、普通でも無いんです。諦めてください。」

無意識が無い、分かりやすく言つてやりますと、パソコンが無意識  
のうちに何かしますか？否、しません。全てがプログラムされています。  
・・・まあ、ウイルスに侵されたらどうかは知りませんが。  
私も、それと同じです。ああ、全てがプログラムと言うわけでがあり  
ませんよ？しっかり意識があり意思もあります。しかし、常に稼  
働状態、無意識などあるはずがない。無意識、意識していないと言  
う事はつまりスリープ状態です。常に稼働している私はスリープに  
はなりません。

「では、そろそろまじめに本題に入ります。まず、私の取り扱い方  
ですが、これが最も大事です。良いですか、よく聞いてください。」

舐めさせを一瞥したから、おひくつたの唾葉を口に呑む。

「私に、殺意を向けてはいけません。」

## 第八話 地靈殿でのお仕事です

「私に、殺意を向けてはいけません。」

「ええ、向けてはいけません。絶対に。自殺願望があるのなら別ですけど。」

「……何故ですか？」

「そうですね……、詳しく述べ話せませんが、私の境遇が影響していまして、どうやら殺氣を当てられると自動的に何故か殺してしまうのですよ。と言つわけで、殺氣は当てないでください。それと、御主人……で、良かつたですか？さつきからずつとそう呼んでいますけど。」

「御主人……微妙ですね。お嬢様では駄目ですか？」

「私がお嬢様と呼ぶのは、過去でも未来でも一人だけです。」

「残念です。では、皆が言つてるようにさとり様で良いですよ。」

「了解しましたさとり様。ああ、それと、確かさとり様の能力は『心を読む程度の能力』でしたよね？」

「ええ、そうですけど……。」

「大変便利な能力です。」

「え？」

あれ？何を驚いているのでしょうか？心が読める、これ以上ないほど便利な能力だと思いますけど。執事にとつては。

「便利な能力ですが……私には絶対に使つてはいけませんよ？情報過多で廃人になってしまいます。理由、要りますか？」

「お願いします。」

「了解しました。私は、今は肉体を保持していますが、元々は私の能力によって作り上げたモノです。私の能力は知っていますよね？つまり、情報によって作り上げたわけですから、当然この体は肉で出来ているのと同時に情報の塊もあります。そんな体で出来た生き物の考えを読んでみなさい。私も能力がら、さまざまな事を高速で思考していますが、それも助長して、あなたが私の心を読んだ瞬間、本当に、さまざまな事があなたの脳に入ります。ですから、止めてください。私は、お嬢様のお知り合いの方を傷つけたくも、廃人になたくもありません。」

「・・・分かりました。予め言つていただき、ありがとうございます。」

「まあ、そういうわけで、私の事はからかえませんね？残念でした。」

「なつ！」

「では、最後に一つだけ。あ、忠告ではなく質問ですが、よろしいですか？」

「ええ、良いですよ。」

「では、さとり様は随分と凶悪な化け物をペットにしてらっしゃいますね？私、来た時にビックリしちゃいましたよ。あんな凶悪な止めてください。」

「ん？なんでしょう？」

「私のペットは皆家族です。そんな風に言わないでください。例えあなたでも許しませんよ。」

「なるほど。皆、家族ですか・・・。」

「これは失礼しました。私としてもあれは飼っているとは少々驚い

てしまいまして。分かりました。あれもあなたの家族として扱います。食事はどうしますか？」

「力の強いペットは基本的に自分で食事をしているので・・・まあ、私が作っているのですけど、人型になれないペットの食事をお願いします。」

「あなた方の食事はいいのですか？作りますよ？」

「いえ、私の楽しみの一つでもありますので・・・」

「ですが、一時的にとはいえ、主に食事を作らせるのは執事である私の何と言いますか、プライド的なものが許せません。せめてお手伝いくらいさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「それなら大歓迎です。」

よかつた・・・。なんとか執事の沾券は守られました。

「フフフ。」

「なんでしょう？」

「いえ、存外、子供っぽい所もあるのですね？意地になつたりして。」

「なつ・・・。」

「こ、子供っぽい・・・？そんなこと言われたのは初めてですね。

「はい、一本取りましたよ。」

「・・・フフ、一本取られちゃいましたね。やられました。」

ふむ、初めはお嬢様の元を離れるなど苦痛の極みでしたが、存外、楽しめそうではありますか。

「では、お仕事は何時から始めましょ？」

「そうですね・・・今からお願ひ出来ますか？」

「それはさとり様の御命令とあらば今すぐこでもやつてまこります。  
じゃあ、レン、いくよ。」

「うん。」

「よろしくお願ひします。」

「いえ、当たり前の事です。」

早速、執事を始めますか。まずは・・・、

「レン、さとり様のペツトに食事、出来る?」

「ん。」

「じゃ、お願ひ。」

「ん。」

私は掃除ですね。屋敷の隅から隅まで掃除しますよ。それらをさつさと終わらせて、さとり様の身の回りの世話及び、食事の手伝い、身の回りの世話、入浴の準備、身の回りの世話、就寝の準備、身の回りの世話、そして、お田覓めになるまでずっとお傍にいると言つ仕事が残っています。え?身の回りの世話が多い?いやいや、そこに素晴らしいよ!コソゲふんげふん!子供が居ると言ひの世話しないのはあり得ないでしょ?私は子供が好きですよ?

「ま、それは良いとして仕事、しましょうか。」

ふむ、思つたよりも片付いてらつしゃる。さとり様は家庭的と見ました。・・・あ、ですが、細かいところまではさすがに出来ていませんね。やはりあの小さい体でこの結構大きい地靈殿の隅々まで掃除するのは大変ですよね。よくもまあ、今までやつて来れたものです。大体、あの能力の所為で結構恐れられているようですね、色々な方から。恐れられていなにしても、苦手としている人はたくさんいるでしょうね。唯一苦手ではなく、恐れてもいない人と言えば、

此處にいるペツトたちではありますか？私ですか？恐くもありませんし、苦手でもありませんよ。自分は心を読まれないから？否、否否否。自分で安全地帯にいるから安心？それも否。断じて否ですよ。そもそも、何故心を読まれるのが嫌なのですか？自分がやましい事を考えなければ良いだけでしょう？それに、読めてしまつ方もそれはそれで大変だと思います。人の悪意も、全て読めてしまつのですから。それなのに、今までよく心を閉じずに生きて行けましたね、さとり様は。純粹の尊敬できます。

「・・・っと、思考に漫かり過ぎましたね。」

「どうですか？順調ですか？」

おっと、さとり様が背後にいたようです。思考に漫かり過ぎて気付けませんでした。迂闊です。

「どうしたのですか？何か考えていましたのですが。」

「いえ、何でもありません。」

「言つてください。主命令です。」

「権力乱用ですね。まあ、それを言われてしまつたら、つらじかありませんね。さとり様の事を考えていたのですよ。」

「私の・・・事ですか？」

「ええ、これから、どのよつて身の回つのお世話をじょつかと、いつで頭がいつぱいです。」

「ななつ

「はい、一本。」

フフフ、本当にからかい甲斐がありますね。

「だ、騙しましたね！？」

「いえ、実際、数分はその事について考えていました。残りの数分

は何を考えていたか秘密です。」「

「何故ですか?」

「それも秘密です。さて、掃除も終わりましたし、次はさとり様のお世話ですね。」「

「つ、な、何をする気ですか?」

え、何つて、もちろん・・・

「さとり様にもお仕事があるのでじょう? それの手伝いや、お飲み物を入れたり、おやつ持つてきたり色々ですが・・・もしかして、お着替えを手伝つたりするとか考えてました?」「つー?」

おー、見事に赤くなりましたね。林檎みたいです。

「さすがにそこまではしませんよ。まあ、お嬢様のお着替えは手伝いますけど。」「

「レミリアさんは鏡夜さんに手伝つてもらつてているのですか?」「ああ、別に直接脱がしている訳ではありません。そうですね・・・レンー? ちょっと良いかな?」「

偶々私たちの近くの廊下を通りていたレン。都合が良いです。

「何・・・?」「

「ちょっとじつとしていてね。」「?

「?」

今のレンの服は真っ黒。白い髪と見事に相反していますが、それもまた似合っています。と、白邊話はここまでにして、早速指パッチンします。

「あ・・・服。」

真っ黒から真っ白にしてみました。うん、似合ひ似合ひ。

「どういつ仕組みですか？」

「あー、はい、えっとですね、私の能力は小難しいこと考えず分かりやすく言つてしまふと、知つてゐる事ならある程度、何でも出来ると言う事です。で、今回のは私はレンの服はどこに入つていて、どんな配置なのかを知つていていたので、レンの着てゐる服と、その仕舞つてあつた服を瞬間的にチェンジしたわけです。分かりました？」「・・・色々ツッコミたいところもありますが、理解はしました。それらは、知つていなくてはいけないのですか？」

「ええ、割と細かいところまで。まあ、これは瞬間移動にも使えます。今のところ瞬間移動できるのは地靈殿と紅魔館だけですけど。緯度経度をしつかり理解していれば、何らかの物と私を入れ替えて瞬間移動します。それ以外の方法だと、緯度経度理解したうえで、噂されないと瞬間移動できません。こちらの方は物は要らないのですが、条件が難し過ぎるので基本前者を多用します。」

「そうですか。御説明、ありがとうございます。」

「いえ、さとり様の頼みですからね。答えられる事には極力答えます。」

「・・・では、好きな女性のタイプ「お嬢様です。」・・・・・。」

「また一本ですね？」

「・・・そのようです。」

あー、本当に楽しいですね。

「まあ、少し真面目に答えるとしたら、そうですね・・・家庭的な女性は割と好感が持てます。紅魔館で言う所の咲夜殿でしょうか？」

「やつなんですか？てつせりやつこいつには興味が無いのかと思つていました。」

あ、因みに喋りながらでもちゃんと職場に向かつて前進していますよ？掃除が終わつたと言つのにその場にずっと留まり続けるのは時間の無駄ですから。レン？ペットと戯れに行きましたよ。

「興味はありませんよ？ですが、『あえて』言つのならそういう方と言つだけです。私のタイプはお嬢様オンリーです。この壁は、発泡スチロールの剣でも軽く突き破りますよ。」

「意外と脆いですね！？」

「失礼、間違えました。私の忠誠心はそんなもんではありません。」

「で、ですよね。」

「紙の剣でした。」

「さらにランク下げてきた！？」

「失礼、噛みました。」

「嘘ですね。」

「噛みまみゅた。」

「嘘じやない！？」

「神は死ね！！」

「物騒なこと言わないでください！」

・・・噛んだのは本当なんですよ？実際は紙の剣では無く、神の剣と言いたかったのですから。神は死ね？本気ですか。クソつたれな『ピ――――!』なんて滅べばいい！

「いいです。」

どうやら着いたようです。扉を開けると・・・

「あ・・・鏡夜。」

「レン、準備していたの？偉い偉い。」

頭を撫でてあげます。

「ん・・・。」

気持ち良さそうに田を締めてますよ。可愛いですね、可愛いですね、可愛いですね！……！

おっと、危ない。忠誠心が。

「・・・どうしたのですか？」

「いえ、忠誠心が体から飛び出して表に出たのを抑えてつけてこようとしたのです。」

後頭部をトントンします。

「へよく分かりませんが、彼女・・・えっとレンさんでしたか？」

「・・・・・。」

ツ、ツーンヒしてますね・・・。

「ええ、そうですよ。」

「レンさん用意してくれたんですか？」

「まだ淹れていませんが、茶葉とお湯、容器、それとお菓子を用意したのはレンですね。」

「・・・すいです。お菓子も美味しいです。」

フフンー、レンは優秀さんですからね！

「では、さとり様は仕事をしてください。私は紅茶の準備をしますので。あ、紅茶で良かつたですか？」

「できればコーヒーが良かつたのですが、構いませんよ。」

ふむ、コーヒーですか。

「任せてください。コーヒーなら私が常備しています。すぐに用意します。」

「ありがとうございます（何故、常備？）」

「砂糖は淹れますか？」

「お願いします。」

「チツ・・・了解です。」

「ちょっと待つて下さい。何故今舌打ちをしたんですか？」

「そんなこと、していません。」

「嘘です。私はしっかり聞いていました。『チツ』って言いましたよね？」

「・・・・・ハア、あー、はいはい、言いましたよ。それがなんスか？ダメなんスか？」

「態度悪！？」

「失敬、ちょっと悪乗りしてしまいました。舌打ちした理由ですが、単純に砂糖が無かつたからです。ミルクならあるのですが・・・。」

「ミルクでもいいのでグレ無いでください。不似合いです。」

「・・・・まあ、私もやつていて反吐が出そうでしたが。」

やさぐれは良いでしょ？やつてみましょ。あー、そうですよ。どうせ私なんて砂糖も常備していないダメ執事ですよ、ケツ！・・・。喉に酸味が昇つきましたね。

「私はやはりこちらの方が性に合つてますね。」

「そうです。それでいてください。・・・では、私は仕事をします。」

「

そつ言つて書類?にサインやらなんやうをするわとつ様。さて、私は「一ヒーを淹れと。

「どうだ。」

「はい。」

「熱いのにお氣を付け下さい。」

「はい。」

さて、私は、ちょっと私用で出かけてきますか。

「失礼します。」

私用と言つのは当然砂糖です。少しでもいいので買っておきたいです。・・・が、率直に聞きます。

この土地に砂糖つて売つていますか!?

人里を見たところ、文化は江戸時代辺り、もしくは安土桃山?まあ、そこから辺であり、砂糖が普及しているかどうかすごく心配です。・・・いや、待つて下さい。確かに甘味処とかありましたね。なら心配ないでしょ。売つてますよ。

と詰つ事で早速町?へ。

「すみません。この辺りで砂糖が売つてある所は無いでしょうか?」

「ん?確かにあの店で売つていたぞ。」

「ありがとうござります。」

「まあ、待て兄ちゃん。折角だからひりひりの店でも何か買つてくれよ。」

「ふむ、酒屋さんですよ……。」

まあ、私もお酒は好きですけど……まあ、買つてみましょうか。

「では、その神殺しとこう「神殺しはあるか?」酒を……。」

ん?

「なんだい? あんたもこれが欲しいのか?」

「欲しいと言つて買つのですけど。」

「……見たところ、唯の人間じやないか。人間にこれは飲めないよ。」

「そうですか? なら……、店主、ちょっとこのお酒、飲ませて頂いてもよろしいでしようか?」

「買つてくれるんなら良いぞ。」

「では……、ンク、ふむ、度数は高いですけど、中々美味しいではありませんか。」

「……驚いたねえ。唯の人間じやなかつたか。あんた、名前は?」

「私の名前ですか? 十三夜鏡夜です。」

「私は星熊勇儀だよ。鏡夜つて言つたかい? あんた、中々いける口と見た! ちょっと私に付き合いな!」

「はい?」

「さあ、行くよ……。」

え、あ、ちょ、待つてくだ……つて、力強いですね!?

「おつと、鬼に力で抵抗してくるなんてやるじやないか! でも負け

ないよ……」

・・・私の能力は、情報を操る程度の能力。筋力などいくらでも上げますし、誰にも負けないと思っていましたが・・・。

「ほら……ぐずぐずしないでさつさと行くよ……」

何故でしそう?この人には勝てる気がしません。

## 第九話 子供は人類の宝。異論は認めませんよ

「……………フハ！……………そろそろ良いですか？」

「何言つてんのさー これからが本番だよ！！」

あ、皆様方、どうも鏡夜です。ただいま鬼の勇儀殿に捕まり、飲み比べをしている最中です。仕事中に何酒飲んでんだよと、心の中で突っ込んでくれたあなた。私もそう思います。ですが、考えても見てください。鬼に捕まっているのですよ？逃げられますか？ 否、逃げれません。力が強すぎます。あの山をも崩すと言われている力で拘束されてみなさい、本当に動けませんから。私の能力でも対抗できない力つてどれだけ強いのですかと、問いたいところですね。能力が関係していそうですけど。

「さあ、もう一杯！」

もう一杯つて、もう酒瓶で床が見えないぐらい覆い尽くされていますけど？むしろ、これだけの量、よく入りましたね。そこに私は驚きました。

「ん？ なんだ、限界か？」

「いえ、まだいけますけど…………」

「そうこなくつちゃー！」

ハア、私、執事ですから嘘は苦手なんです。いえ、苦手と言いますか、こうこうなんの邪念もなく純粋な気持ちで接してくる人に嘘を

つのが苦手です。からかう事は出来ますよ？ 趣味ですか。因みに、全くの余談ですが、今の勇儀殿の服装は鮮やかな模様のついた明るい紫色の着物を着崩して着ています。肩とか鎖骨とかもろに言えていますが残念。私はそういう事全く気になせん。ついでに私は普段の執事服に黒のマントをはおっています。何故マントか？ 気まぐれです。

「ンク、ンク、ンク、プハア～！ うまいねえ。」

「ブハ、まあ、確かにおいしいですね。これはぜひ買つていただきたいです。」

「この酒は私も一押しだよ！ ・・・とにかく、鏡夜は此処では見ない顔だけど、新入りかい？」

「なんの新入りかは理解しかねますが、私はお仕事で地靈殿にお住まいのさとり様の執事をしております。まあ、一週間程度ですけど。」

「地靈殿に？ またモノ好きなのが居たもんだねえ。あそこで働くつていう奴も滅多にいなって言つの。」

でしょうね。

「まあ、確かにあそこで働くつて人は少ないかもしませんね。私は全く気にならないのですが。」

「そりやまた、変わりもんだねえ。その飲みっぷりと言ひ、気に入つた！ ほら、飲みな！」

「頂きます。」

・・・ブハッ、ふう、美味しいですね。

「美味しいのですが、そろそろ本氣で帰らなくてはいけないので、今日の所はこれにて。あ、お代はこれで足りますか？」

勇儀殿にお金（先ほど作った）を渡す。

「十分だ。奢ってくれるのかい？」

「はい、良いお酒を教えてくれた礼です。」

「そりゃい。なら、ありがたく奢つてもらひますよ。」

では、と言つて、瞬間移動・・・代償なしの方で地靈殿に移動します。砂糖はちゃんととかつてありますよ？ ついでにお酒もですけど。

「ただいま戻りました。」

「あ、鏡夜さん？ ずいぶん遅かつたですね？」

「申し訳ございません。色々あります。」

「ぽかすなんてらしくありませんね？」

「・・・鬼と呑んでもました。申し訳ありません。」

「鬼と？ ・・・もしかして、勇儀さんですか？」

おや？ あの方は有名人なのでしょうか？

「知つているのですか？」

「知つているも何も、此処でも地上でも知らない人・・・もとい、妖怪は居ないと思いますよ？ まあ、あの人に絡まれたのならじょうがないですね。大目に見ます」

「ありがたき幸せです。」

「それで、どのくらい呑んできたのですか？」

「そうですね・・・酒瓶で床が見えなくなるぐらいでしちゃうか？ あ、代金のほどはこちうらになります。」

「ひゃく・・・！？ ・・・そんなお金、何処から？」

「作りました。」

「・・・そりですか。そこはあえて無視しておきます。といつよつ、

随分と酒豪なのですね？」

「酒豪？ 私が？ 呲々、酒豪ではありませんね。」

「酒豪ではありません。これでも、生前はちょっと呑んだだけで顔が真っ赤になつてましたのですよ。」

「？ おかしな話ですね。じゃあ、何で酔つていらないんですか？」  
「お酒はおいしいとは思うのですが・・・この体を作る際に有害物質は全て受け付けないようになつましたからね。アルコールなど、すぐに削除されます。」

「そうなんですか。」

さて、ちょっと長く話し過ぎちゃいましたね。・・・何故、せとり様との話は何時も長くなるのでしょうか？ あちらの知的好奇心の所為なのか、はたまた私が喋り過ぎなのか。まあ、どちらでも私のすることには変わりがなので別に良いのですが。

「今はどつこつ状況ですか？」

「状況？ ・・・ああ、今は晩御飯を作つとしていたところです。」

「承知しました。では、お手伝いさせていただきます。」「よろしくお願いします。」

料理ですか。何気にお嬢様たち以外の人に振舞うのは初めてですね。まあ、悪くないです。

「では、今日のメニューは？」

「今日は和食で行こつかと思つています。」

「把握。作るものは決めていたりしますか？」

「白米、味噌汁、焼き魚、お浸し、と言つたところでしょうか？」

「ふむ、ならそこにお漬物と冷奴を追加しましょ。それだけでは夜にお腹が空いてしまいます。そこからの間食と言つたコンボにつながるのですが、間食はあまりしない方がよろしいので、晩御飯で事足りるよつにしないと。」

「フフフ、分かりました。では、早速作りましょうか。」

と言つわけで、料理開始です。まず、白米ですが、この土地には炊飯器なるものが無く、釜戸でフーフーしなければいけないようです。味噌汁もまた然り。・・・しかし、冷蔵庫はあるのですね。良く分かりません。電子レンジは無いようですが・・・何故冷蔵庫だけあるのでしょうか？ 気になります、気になります、気になります、そ  
うは思いませんか？

と、無駄なこと考えていないで早速行動・・・に・・・

「・・・フ ッ。」

な、何と言つ事でしょう。ここは天国か何かでしょか！？ 料理を作る所に入つたら何故かレンが先にいて、釜戸をフーフーしてい  
るではありませんか！！ 素晴らしい！！ エクセレント！！  
おおつと、フラッとしてしまいました。

「・・・ふー。よし、私は冷静です。決して熱暴走など起こして  
ません。」

「どうしたのですか？」

「いえ、釜戸をフーフーしているレンがあまりにも可愛すぎでしょ  
うとフラッとしただけです。他意はありません。」

「邪な考へでいっぱいですね。」

「あんな可愛い生物を見て何も感じない方がおかしいのですよ。」

全く、さとり様は分かつていませんね。幼じょゲフングフン！ 子

供の素晴らしさを一小一時間ほど御説明してあげたいぐらいです。

「あ・・・鏡夜。」

「レン、お疲れ様。なんで、」飯を?」

「誰もやつてなかつたから・・・・・・私がやつて思つた。」

「おおー、まわかのボランティア!―――出来の大変な娘を持つて私は幸せ者です。」

「・・・えりこ?」

首を「ナーナン」とさせじて訪ねてくるレン。よろしく、ナーナーナーナしてあげましょー、可愛いですか?」

「うふ、偉いよ。すばく偉い。」(ナーナーナ)

「・・・・・フフ。」

撫でられて気持ちよさでうに田を細め、わずかに笑つているレン。

ああもうー、可愛すぎますよこん畜生ー!――

「・・・・・残念なイケメンとはこの事でしちゃうか?」

「ん? 何か言いましたか?」

「いえなにも。それより、早く準備しましょー。」

「そうですね。」

「とつ様の命によつ、名残惜しいですがレンの頭から手を離します。ああ、そんなに懇願するよつた田で見ないでください。」

「ハア・・・・、じゃ、作りましょーか。」

「何故私が悪者みたいになつているのですか?」

「そんなことはありません。あ、レンも手伝ってくれるかな?」「うん・・・これやつてる。」

と言つてまたフーフーし初めてレン。お持ち帰りしたいです。あ、お持ち帰り出来ますね。

「では、私は焼き魚とお浸しを作りますね。」

「じゃあ、私は味噌汁と豆腐とお漬物を。」

まず、焼き魚ですが、定番どころで鮭です。ああ、因みに私の調べたところによりますと、この幻想郷では魚はあまりとれないそうです。まあ、海が無いので当たり前なのでしょうけど、それを解消しているのがハ雲紫と言う方らしいです。どうやら、能力で幻想郷に魚を提供しているようです。まあ、最近の様ですけど。それ以来、結構皆さんが魚を食べるようになつたようです。地靈殿も然りと言つたところですね。

焼き魚、と言つても、ガスコンロみたいなのがある訳ではありません。七輪ならあるのでそれで焼くとしましょう。えーっと、人数は、私を除いてですから、5ですね。やりますか。

「・・・鏡夜。」

「うん? どうしたの?」

「ご飯炊けた。」

「なら、お茶碗に盛りつけてくれるかな?」

「うん。」

本当に出来た娘です。

魚を焼いている間にお浸しを作りましょう。まあ、ものすごく簡単なのですけどね。水で洗つて 何故、水道はあるのでしょうか

？　水を切つて、醤油を付けて、鰹節を適量乗せてハイ終わりです。・・・簡単過ぎますね。昔の方々は、質よりも唯食す事を優先したのでしょうか？・・・あり得そうですね。案外、お刺身の起源もそういう所かもしませんね。『焼いて食べるのが面倒なら、そのまま食べれば良いじゃないか！』みたいな感じで。

「鏡夜さん、どうです？　何か不具合はありますか？」

「いえ、大丈夫です。」

「・・・・・？　魚の数が足りないようですが？」

「？　いえ、これで合っていますよ。」

さとり様、こいし様、お空殿、お燐殿、そしてレン。12345、合っていますよね？

「・・・鏡夜さんの分は？」

「私の分・・・ですか？　私はそもそも食事を必要としませんので必要ありませんよ。」

「駄目です。食事は皆で一緒にがこの家のルールです。この家の執事である以上、この家のルールに従つてもらいますよ。」

「・・・承知いたしました。しかし、本当に私の食事に意味はありませんよ？」

「口で食べる事に意味があるんですよ？」

魚の片面が良い感じに焼けたので、全て一瞬でひっくり返します。無論、能力で。

「・・・そうですか。口で食べる事に意味が・・・。」

「そうですよ。」

「了解しました。では、私の分も用意します。」

お浸し一つ追加です。魚？ 魚は後でレンに・・・フフフ。

「・・・ふむ、魚はこれぐらいで良いですね。さて、お皿に入れま  
しょうか。」

お皿に入れ、醤油をちょっと加えるとおいしいです。あ、知つてま  
すよね。

「レン？ ちょっと良いかな？」

「・・・何？」

「これ（魚）フーッしてくれないかな？

「ん、分かった。」

そう言つと、息を吸い込み、そして

「フー——————！」

炎を吹きました。そう！ これがレンの数ある能力の中で希少な『戦闘向け』の能力です。その名も『火を吹く程度の能力』。そこ！ 地味とか言わない！！ レンが悲しんだらどうするのですか！！ この能力、唯火を吹くだけなのですが、その吹ける火の質や、タイプの数が膨大なんです。例えば、ガスバーナーのように火を吹く事も出来れば、熱線を吹いたりもできます。質で言つと、唯赤い火吹くだけではなく、青、白、本気になつたら黒と、まさに万能です。・・・黒炎だけは何か違う気もしますがそこは気にしてはいけません。前、気になつて聞いてみたところ、『気に入したら・・・・・メツー』と言わされて以来気にしていません。・・・可愛すぎで父性が鼻と口から出でてしまったのは仕方のない事です。

「よし、いいよ。」

「ん。」

ジューと音を立てている焼き魚。まあ、私のはこんな感じで良いでしょ。基本、私は何でも食べようと思えば食べれますし。・・・劇物だつた場合、深刻なエラーが発生して、何が起こるか分かりませんけど。

さて、運びますか。

「セトリ様、お持ちしました。皆さんの席はどうですか？」  
「ありがとうございます。私が一番右上でその前がここ。私の隣がお焼で、ここに隣がお空です。鏡夜さんたちは適当に。」  
「はー。」

と言つわけでお焼殿の隣でレンは私の膝の上です。

「おかしいーーー。」

急にセトリ様がシャウトしましたけど、なんなのでしょう。何かおかしい事でもあるのでしょうか？

「なんですかその『何が?』みたいな顔はーーー一人してそんな顔しないでくださいーーー」  
「え、おかしい事ありますか？ レン、どういひへー。」  
「・・・おかしいのは、貴女。」  
「私ですか！？ いや、私はおかしくない筈ですーーー。何故レンさんは鏡夜さんの膝の上に乗つているのですかーーー。」

「・・・特等席。」

「私がアーンして楽しむ為ですか?」

「何当たり前のよつに口走つてこるのですかーー。」

・・・もしかして。

「あれですか? レンに嫉妬ですか? 此処に座りたいのですか?」

「なつ

「ダメ。此処はレンの席。」

レンは独占欲が強いらしいですよ。まあ、私はお嬢様の所有物なのでそこいら辺はあれなのだけど。私の独占権は常にお嬢様にあります。レンは一番目です。

「座りませんよーー。」

「なら、何をそんなに興奮していらっしゃるので?」

「興奮なんかしてませんよーー。ただ、そういう事は道徳的に問題があると思うんですーー。」

「大丈夫ですよ。私とレンは親子関係みたいなものです。言わばこれも親子のスキンシップです。ね?」

「うん。」

ほら、何も問題ありません。

「へへへへへ、分かりましたーー。勝手してくださいーー。」

何をそんなに怒っているのでしょうか? 別段、珍しい事をしているわけでもありませんし、私のレンに対する溺愛っぷりは先ほど見せたはずなので既に周知の事実だと思うのですがはて? 、

その後、食事が冷めないうちに皆さんが集まり、お燐殿には焼き魚の件で『ベリーグッド』を頂きました。恐悦至極です。食後は普通に食器の片付けをし、さとり様はまた仕事に戻られたので、今度こそコーヒーを淹れてお持ちします。砂糖はお好みです。

「熱いですでお気を付け下さい。」

「ありがとうございます。」

ふう、それにしてもさとり様のお部屋は割と広いですね。お嬢様のお部屋よりも広いのではないでしょか？ まあ、この館には使用人がいませんからそういう事なのでしょう。

「熱い。」

「大丈夫ですか！？」

だから気を付けて忠告したのですが！

「だ、大丈夫です。ちょっと驚いただけです。」

「いけません、失礼します。」

と言つて、さとり様の顔を正面から覗きこみ……。

「舌、出して下さー。」

「・・・え？」

「火傷していないか調べますので出して下さい。」

「な、だ、大丈夫ですよ。このぐらいい・・・。」

「駄目です。早く出して下さー。ほら、あー。」

「・・・・・あー。」

・・・・・よし、火傷はしていなさそうですね。

「はい、大丈夫です。失礼しました。」

「・・・いえ、ありがとうございました。」

その後、さとり様の仕事が終わるまで私はさとり様の後ろに控えていました。

（さとり）

彼は、変わっています。

それは既にあの騒動に関わった全ての人の周知の事実なかもしれませんがしぬせんが、それでも私は変わっていると言います。

私の能力を知つて、気味悪がるどころか『便利』と言う所。主をからかつたり、偶に暴言を吐く所。レンさんにたいしての過剰なスキンシップ。

私の能力は他人からしてみれば決して気持ちのいいものではないでしょう。当然です。心を読むのですから。ですが、彼はそれを便利と言つ。恐らく、私が彼の心を読んでいても、それは変わらないでしょう。そんな気がします。

私をからかい、偶に従者にあるまじき暴言を吐きます。不眞面目な従者・・・ではありますね。むしろ、その逆。彼は完璧です。何でもそつなくこなします。しかし、それなのに私をからかいます。食事前もそうでした。からかうのが趣味だと言つていましたし、實際そうなのでしょう。ですが、そんな彼は私がコーヒーを飲んで火傷しかけた時、普段の冷静で悪戯心満載の顔を急に眞面目な顔に変えて私の心配をしてきました。従者としては正しいのでしょうかが、あまりの豹変っぷりに少し驚きました。・・・不覚にも少しどキッとしてしましたし。

レンさんに対しては・・・まあ、普通に愛情を注いでいるのでしょうか。あの教育でよくあそこまで出来た子供が出来たかと思うと不思議でなりませんけど。

「ふう・・・。」

で、私は今お風呂にて入浴中です。今日一日、随分と濃い日になりました。これも彼・・・鏡夜さんのおかげでしょう。ペシトと妹以外と話すのも久しぶりですし、良い一日でした。後、六日ですか・・・。短いですね。いつそのこと、紅魔館の主に言ってみましょうか？ 鏡夜さんをくださいと。あれほど出来た従者、そつは居ません。

「いえ、無理でしようね。」

あの吸血鬼は鏡夜さんをかなりといふ言葉では言い表せないほど大切に思つてゐるようです、何より、鏡夜さん本人が彼女以外に仕える気がなさそうですから。・・・残念ですね。

「さとり様、お湯加減はどうですか？」

！？ きょ、鏡夜さん！？ 何故、扉越しにいるのでしょうか！？

「何故そこにいるのですか！？」

「何故ですか？ 入浴中に不備があつてはならないと思い、いつし待機しているのですが・・・。」

「いいです！ 入浴大丈夫ですから、私の部屋で待機していくください！？」

「はあ・・・しかし、お着替えは？」

「それぐらい自分でやります！？」

「・・・分かりました。では。」

・・・色々と予想の斜め上を行き過ぎて大変ですね。彼がいるだけで日々の生活に飽きが無くなりそうですね。・・・心労を溜まりそうですけど。

（鏡夜）

かとつ様に自室にて待機と言われたので、今待機してします。

「じっちゃんぽい。」「

私、グー。レン、チョキ。

「あつち向いてほい。」「

「あ・・・。」「

勝つ負けこましたよ。

「むう・・・。」「

「止めますか?」「

「あ・・・。」「

と並ひわけで、10戦中7勝3敗です。

「むう・・・。」「

レンがむくれちゃいましたよ。可愛いですわ。

「そんなにむくれないで。ほり、ハロア飲む？」

「・・・飲む。」

「はい。」

両手でコップを持ち、フーザーしながらハロアを飲むレン。  
「いい！」

「何やつてるんですか？」

「レン観賞ですか？」

「もうシッコミませんよ。では、私はもう寝ます。明日もまたよろ  
しくお願いしますね？」

「もううんです。お任せ下せー。」

フツとゆづく火を消します。

「お休みなさい。」

「お休みなさいませ。」

さて、見守りましょーか。さとじ様が起きるまで。

「・・・レンせざつする？」

「・・・此處で寝る。」

と言つて、体を横にして私にもたれかかってきました。いや、構い  
ませんよー。

「お休み。」

「・・・ん。」

あと6日、滅私奉公、粉骨碎身、お仕えさせていただきますよ、さ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8502w/>

---

東方従者録～すべては我が主の為に～

2011年11月17日19時57分発行